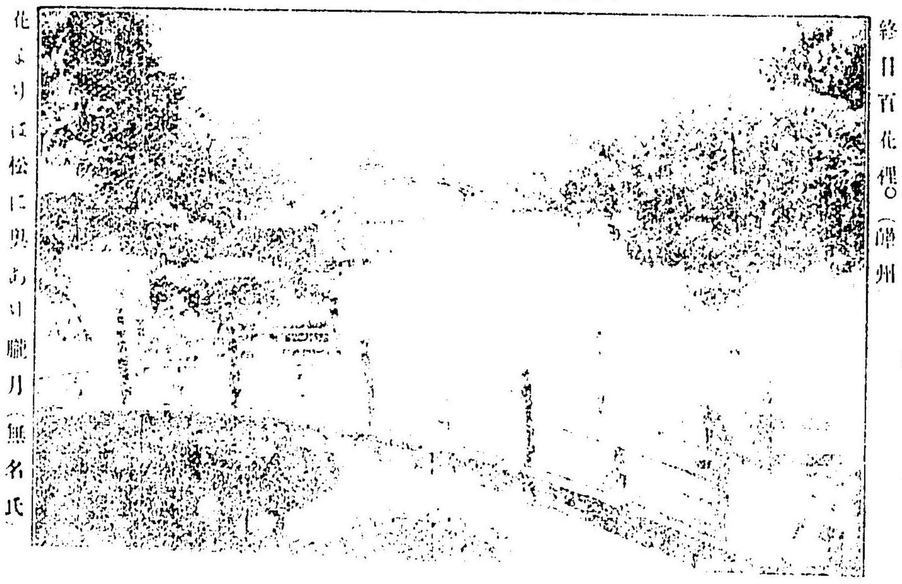
高松新繁昌史自序

本書新繁昌史と題す。史にして史にあらず。記か記にあらず。論か論にあらず。史と見るも可なり。記と見るも可なり。論として見るも可なり。著者豈に文體に拘泥して筆端を束縛せられんや。況んや無學短才文體の如何を辨へず。所謂盲目の蛇蝎を恐れざるの類か。人生此に至て大膽寧ろ憐む可きものあらん。史か記か論か。暫らく讀者の判斷に任す耳。一言を題して自序に代ふ

讃岐　春琴樓主人識

高松栗林公園其一



朝度迎春橋。凝閑化成路。出化又入化。
終日百花裡。（讃州）

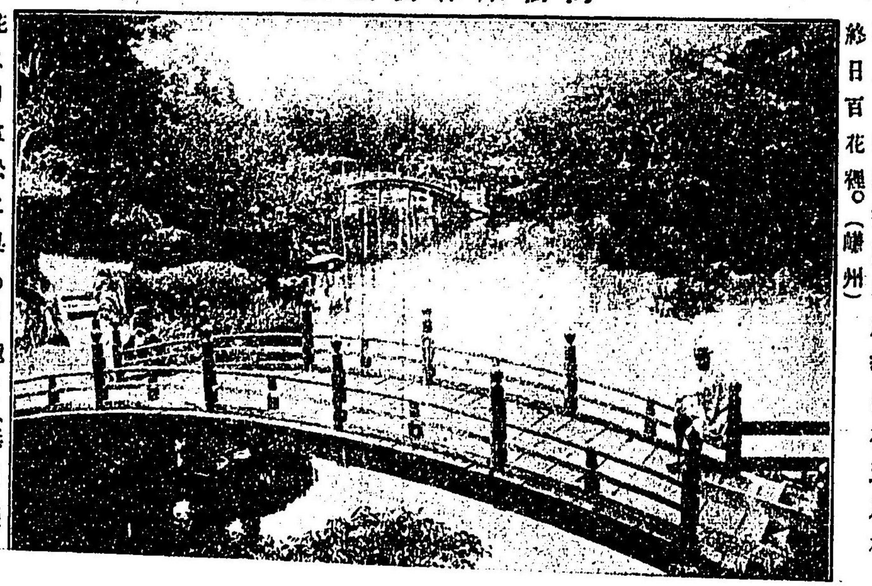
化より江松に興あり臨川（無名氏）

第二自序

余本年晩秋。腦疾を患み。業務を放擲する殆ど三旬日。醫師來り診して曰。汝文筆の癖あり。思ふに崇をなすならんと。慈母山妻傍に在て其說を贊し。交ゝ余を諫む極めて切なり。余心深く其非なるを知る。伏櫪無聊太し。病間窺かに筆を執て。此閑文字を寫す。園手の禁慈母の愛山妻の恩に背き狂げて此書を著す。亦た是れ一種の病のみ。然れども我にて樂限なし。豈に良藥石たらざるなきを知らんや。記して以て第二自序となす

著者又識

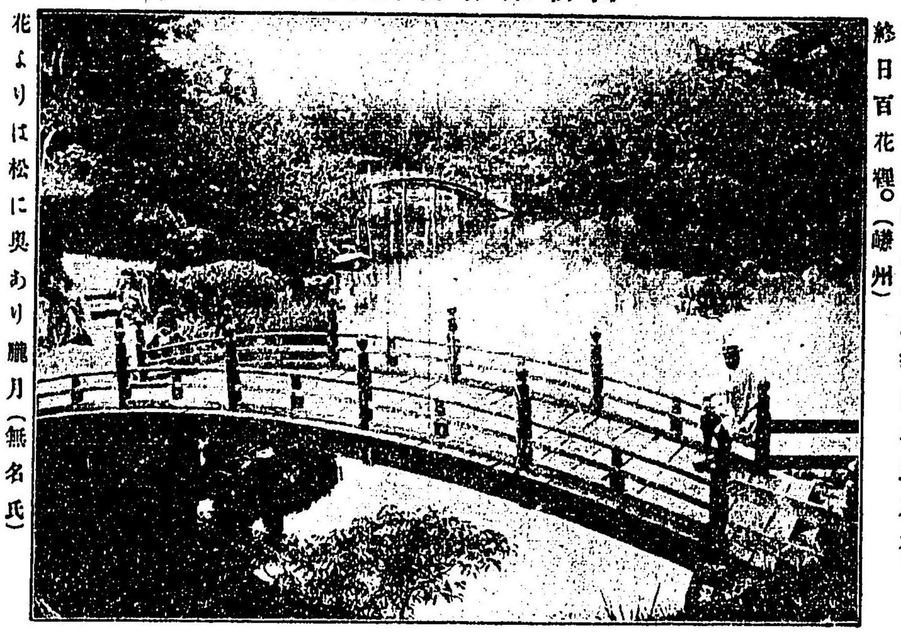
高松栗林公園其一



朝夜迎春橋。繞閣花成綺。出花又入花。終日百花裡。（嶽州）

花よりは松に奥あり朧月（無名氏）

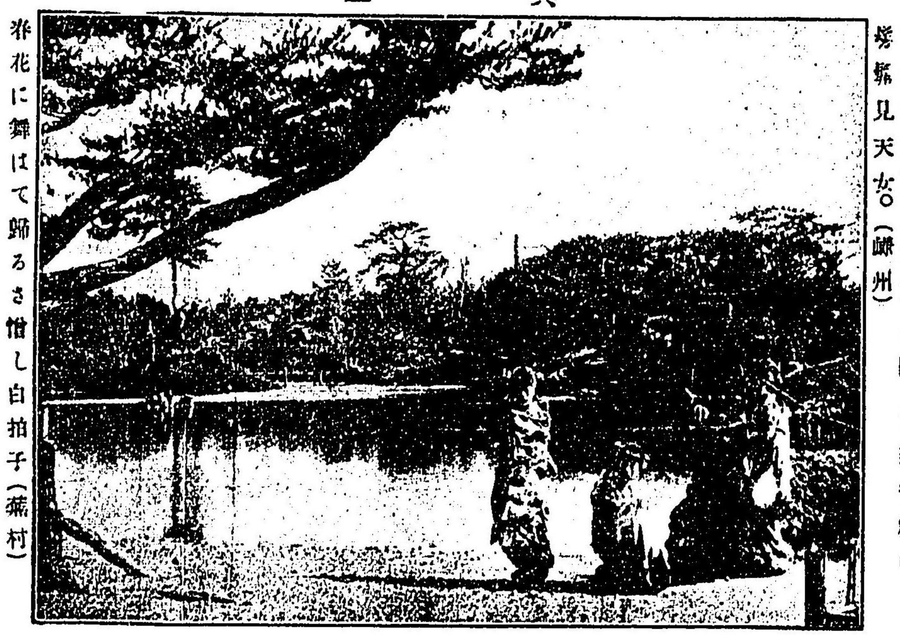
高松栗林公園其一



朝度迎春橋。繞闌花成綺。出花又入花。
終日百花裡。（嶽州）

花よりは松に奥あり朧月（無名氏）

其二



高樓夜讌闌。月明望島嶼。仙樂杳霧中。
髣髴見天女。（嶽州）

雀花に舞はて歸るさ惜し白拍子（蕪村）

高松市讃岐盛堂活版印刷所印行

82-407

高松新繁昌史目錄

緒論附小引
高松の沿革
高松文明の誘掖 川崎舍竹郎傳 神保直吉傳 佐々木清三傳
高松繁榮の北漸
高松の地形
常盤橋通附片原町の夜景
演劇場
官衙の光景
香川縣廳
高松地方裁判所附辨護士詰所

高松警察署
高松市役所
高松市會
香川縣會
高松新港灣
新港繁榮論（八重垣遊廓移轉私議）
高松竹枝○高松八景
盂蘭盆踊
盆踊復活論
神社の祭禮
石清尾八幡宮（市立と祭典）
蛭子祭と愛宕祭（夏祭の盛觀）

附り十日蛭子と福寿ひ
高松花柳盛衰論
愛宕祭附り由加祭の歸帆
讃岐鐵道高松停車場
旅館と割烹店
淀川樓
時和園
高松藝妓券番所（東券と西券）
高松妓流の特色
愛妓論
妓風改良論
高松の實業界

高松の賣藥商

大津繪一首

病院と醫師（高松の衞生器關）

高松新繁昌史目錄終

高松新繁昌史

讃岐　春琴樓主人戯著

緒論附小引

昔より筆を繁昌記に染むる者多くは花柳社會の本事を傳ふるを以て主觀となし一塲の竹枝たるに過ぎず、寺門靜軒の江戸繁昌記、服部撫松の東京新繁昌記、成島柳北の柳橋新誌、松本萬年の新橋雜記等概ね其類のみ、素より泰平に謳歌する閑文字にして一時の戯墨に過ぎずと雖も風教の上に於て多少の流弊なしとせんや、宜哉、當時の政府其發賣を禁止し絶版の不幸に遇ふものさへあり、世道人心に及ぼす影響知る可きのみ、抑も繁昌記なるものが花柳の事を記するを以て定義となすか、夫れ豈に然らん、然れども道般の著書が世人の間に歡迎せらるゝ所以のもの啻に著者のみを咎む可けんや

因襲の久しき繁昌記なる文字が花柳の事を意味するかの如く解釋せらるゝは文字の不幸のみ、余が此の不幸なる文字を捕へ來て本書に名つくるもの聊か繁昌記の定義を敷衍して廣義ならしめんが爲なり、本書を審くもの尋常繁昌記の觀をなす勿れ

本書題して高松新繁昌史と云ふ、高松の新開明史なり、高松の沿革史なり、高松の人にして高松の事を說く寧ろ用なきに似た

るも高松人にして猶ほ高松を知らざる者あり、蓋し高松を知らざるに非らす、高松繁昌の由來を知らざるなり、況んや高松以外の人をや、高松の地にして天下に紹介する價値なくんば止む然れども歴史上に商業上に風土上に將た一國の都會として行政機關の含る所、少なくも高松の地を咀嚼解剖して精細纖密の觀察を下すは強ち無用の業にあらず、

假りに世紀なる文字を這般の場合に使用するを許すとせば、余は高松に三大世紀ありと云はむ、曰く白砂廣原時代、曰く封建開市時代、曰く明治開明時代是なり、同じく是高松なり、而して世紀に由て所見を異にす、政治經濟制度文物の盛衰人情風俗の變遷等高松を研究する點に於て無限の趣味を有す、

白砂廣原時代我亦た何をか言はん、封建開市時代、明治開明時代の高松は如何、本書の要は其間の消息を記述するに在り、看る人幸に其意を諒せよ

高松の沿革

高松の沿革我是を白鼎の古壺に尋ね、青巻の舊史に徴し、僅かにこれを得たり、然ども亦跡茫々信據す可きなし、今其最も信す可きものを取り茲に抄録することはなしぬ、好古の士是正するの勞を賜はらば著者の幸福之に過ぎず

天正十五年生駒雅楽守正規に讃岐ノ國を賜ひ當國に入部引田城に居る、後國の中央なるを以て鵜足郡聖通寺山の城に移り賜ふ正規曰く國中在來の居城概ね乱世の要害にして治平に用なし、若かず平陸の地を擇んで居住せんと、雷めて是を香川郡笑原の郷に得たり、此地河流海に注ぐ所白砂一帶洲をなし所謂二穢洲是なり野原の庄に連り西濱東濱とて漁村あり、蟹舎蜆屋處々に點在す、郡中南北に横はる山脈あり、其形象宛ながら梓弓の如く弦打山の名あり、此山の北麓海中に入り波濤の爲め崩壊して海底に沈みしもの立石となり屹然たり是を香川石又た屈石と云ふ、此石久しく四方寺山の北麓に在り田野の間に立ちしが明治十年の頃取除かれしとか何時の間にやら見えすなりぬ、此山大江の東にあるを以て江東

高松の地相は繁昌共に備はり四神相應の象あり

の鼻と云へり、此邊より西濱に至る迄一面の海にして中筋十八町許白砂海中に入り其狀矢の鏑の如し故に笑原の稱あり玉藻集曰讃州香川郡笑原郷往古稱二八幡島一弘法大師之作秘記圖緣記に見て吉凶を卜せしむ、相人卜を布て曰、此地富貴繁昌共に備はり四神相應の地と謂つ可しと

（注釋）四神とは左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武是なり左の方清き流あるを左青龍と云ひ右の方大道あるを右白虎と云ひ、前の打晴て田畠なるを前朱雀と云ひ後に高き山あるを後玄武と云ふ

高松の名山て來る所以

然れとも「聖り寺より野原」へ移るは其詞凶なりとて野原を月出度唱號に改め東の方高松の名を取て城名とし古高松は波の寄り來る所なれはとて寄來村と名け賜へり陰陽師阿部有政に命し地鎮祭を行はしめ衆人圍繞竭仰して天神地祇を降拜し盛んに禮奠を修め高松の命名式成る降て慶長十五年生駒讃岐守一正卒す

高松市丸亀町の由來

今嗣左近大夫正俊世を繼て高松城に居住す一正は正規の嗣子にして西讃岐十二万石を食む丸亀城に居る正俊に至て高松に移る　故に丸亀の市店を高松の郭に移す今の丸亀町卽ち是なり、元和七年正俊卒す生駒小法師幼少にして讃州を受繼ぐ藤堂和泉守高虎外祖父の故を以て國政を見る治績大に擧る高虎寛永七年を以て卒す、寛永十七年生駒壹岐守高俊家臣の爭論に依て讃岐を食放せられ羽州山利郡に左遷す　生駒氏高松に居城すること四代五十四年　寛永年間の高松

生駒氏滅亡

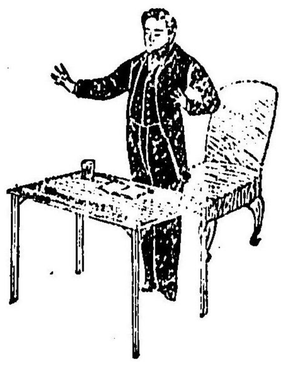
寛永年間の高松

永年間の高松は半島狀をなし、四面江東の穴藥師より龜命山の山麓に至る迄潮水を以て浸はれ、東は野方口迄入潮あり屋島の干潟は坂田中河原迄汐先を受け木多村春日村の如き滿潮の時は一面の青海原なりしなり

寛永十九年源英公の國守たるに及んで高松の地益々繁盛を極め加之運梁を穿ち水利を便にし明治維新に至る迄城鼓聲々三百年

四民其業に安んじ鼓腹擊壤の夢を貪りぬ

明治二年六月高松藩其版籍を奉還す朝廷仍舊高松藩主松平頼聰をして高松藩知事に任す四年七月廢藩置縣高松藩を高松縣と改む同年十一月十五日新に香川縣を置く六年二月二十日阿讃を連ねて名東縣となし高松に支廳を置く八年九月五日香川縣を復し九年八月廿一日豫讃を連ねて愛媛縣となし廿一年十二月三日更に舊に復し香川縣を置く



高松文明の誘掖

附高松繁榮の北漸

維新後の高松は維新前の高松に非らず、制度文物の革新、急劇の變に遇ひ別乾坤を現出せり、這般の消息は單に高松に限れるにあらず、日本全國到處滔々然らざるはなし、然れども高松文明の起源を述べんとせば順序として其間の狀況を傳へざる可からず、懷古すれば明治三四年の交なりき童蒙謬ふて曰、

坊主頭をたゝいて見れば文明開化の音がする

幾千年の風俗習慣を打破し、涙を呑んで斬髪するの狀宛然目に在り、仮令皮想の文明風を擬するにもせよ、當時に於ける斬髪は武士は勿論町人と雖も最も忌む所にして、世を捨て佛門に

斬髪は當時に於ける大決心なり

歸依するもの丶他敢てせざる流俗を學ぶ蓋し大決心なくんばあらず、童謠の類素より取るに足たらずと雖も、聊か以て懷を遺るの具に供せしに外ならず

高松文明の誘掖者として將た新智識の輸入家として高松文明史中に特筆す可きは川崎舍竹郎なり、神保直吉なり、佐々木清三なり、而かして世人多く名を知らず、遺憾に堪へざるなり、吾人をして暫らく其略傳を叙せしめよ

川崎舍竹郎は高松の人なり、城西々濱町に生る家世々窖む、人となり卓越不群にして小節に拘はらず直言鋭論務めて藩政の得失を辯し毫も異色あることなし夙に海外の形勢を觀察し尊く百家の書に涉獵するのみならず譯書を解究し、物理、化學に通ず、而して武術亦絶倫就中弓銃に長ず、經世の志厚く當時の人心守舊の愚を慨し自ら進んで西洋の風を慕ひ蒸流器關を製し、自轉車に跨り、大小銃を製し、或は食擂製造に理化學を應用する等時人の未だ見聞せざる新説を吐く是を以て余之を奇とし怪とし、罵言誹謗、動もすれば羅織して以て異志を抱くとなす、蓋し一町人にして武器を製し蒸氣機關を製造するを以てなり、君常に歎して曰、兵は彼を知り己を知るを以て要とす、方今我國久しく泰平に安し文恬武嬉天下の公伯亦た兵を談ずる者なし而して泰西は然らず干戈を尊れて

高松に新聞紙の盛に輸入せし初め

我政を改良す精日に精を加ふ我今日の急務は形勢を知て兵政を改むるに在りと之を當時の執政に痛論せり而て用ひられず、君が銃鉋を洋式に倣ひ製造せしは實に文久三年なり、維新の際國運の非なるを見自費を擲ち小銃百挺を製し君公に献す、君亦た泰西醫學に通し本業にあらざれども貧困を救濟する幾百人なるを知らず、公共心に富み私財を以て公益を補助する多し君公亦た優遇を賜ふと云ふ、君が塾生の事歴を見るに名譽の爲めにあらず利財の爲めにあらず、一藩一國の是を思ひ其心中亦も私心なかりしなり、君の如きもの實に近世の偉人にして高松の文明に資する大なりと云ふ可し

神保直吉は高松の藩士なり、江戸に遊び洋法の砲術を學び其技に熱達せり、藩に歸り其法を一藩に傳へんとす、時運未だ至らず、藩守家の爲めに擯拆せられ志を伸すを得ず憂鬱歲月を送る偶々橘武平なるものあり、洋銃製造の法を得て歸り着手せんとするも家貧にして目的を遂するを得ず之を神保氏に謀る、氏曰方今執政舊習を墨守し新事業を可納せらるゝ容易の事にあらず、彼の川崎舍竹耶に謀るに如かず、此人公儀を重ずる人なれば必ず力となるへしと果して其加護を得て共に銃鉋製造の業に從ふ、氏が物理學に通し殊に器械學を專攻し當時の發明頗る多し、時辰儀、煙草切器械等是なり、煙草切器械の如き今猶ほ實用に供するものあり

佐々木清三は高松の富豪なり、藩制の時御金御用を勤む、夙に歐州の文物を慕ひ泰西百家の書を渉獵し能く海外の事情に通ず、高松の開化的啓發を以て目的となし博文舍を興し私費を擲ち東京其他の新聞雜誌を購入し衆庶の縱覽を許す純民社を設立し教師を聘し子弟を教育し兼て民權論を唱へ盛んに政治思想を涵養す、高松人文の啓發に就ては其効蹟偉大たり、不幸にして夭折時人之を愛惜す、高松に初めて新聞、雜誌を輸入せしは氏を以て嚆矢とす、君亦た純民雜誌

幼稚なる民權論

を發行し毎月一回演說會を開き開化主意を唱ふ

純民社と殆んど時代を同ふして興りしものは信立社なり、立志社なり、共に自由民權論を唱道す、當時に於ける民權論は實に幼稚なりしと雖も高松人の政治志想は慥かに此間に養成せられぬ、此時に於ける民權論は巡査攻擊を以て能事となし、甚しきに至ては帝室と政府を混同し詭譎の政論を弄する者さへあり、今にして考ふれば一笑だに値するに足らずと雖も時勢の變遷を逃るに於て興味なしとせんや

文明志想の輸入と共に皮想的開化の風俗も併せて傳搬し來りぬ數奇者流の間には怪しき「マンテル」を穿てるもあり、ABCを囀ずるものさへ出來れり、高松の洋學は明治六七年の頃盛に勃興し後大に衰へ明治二十年頃に至り再興せり、余は高松の洋學が第一期時代以後微微したらんには人物養成上非常の効果を奏せしならんに中途に衰微せしは遺憾に堪へざるなり、蓋し縣の分合屢々行はれ國民其途に安せず、教育

器關の設備を缺ざしは何人も吾人と嘆を同ふせん讃岐山來人材の缺乏を思ふ者如何の感かある蓋し無形的志想の輸入に伴ふ有形的物質の傳搬は古今東西其規を一にする狀我高松に於て之を徵す

此時に於ける高松繁昌の狀況は如何、余を以て見れは東南部に其中心點を認む御旅劇場附近より田町、中新町邊の繁盛は今日の片原坊に比す可くもあらざれど比較的繁榮を極めしは疑もなき事實なり

然れども土地の繁榮は山の手に向はずして海邊に出るは殆ど一定則をなし、今や高松繁昌は北漸しつゝあるなり、請ふ更に數十年の後に至り吾人の言の妄ならざるを徵せ

高松の地形

高松の地たるや原一沙嘴のみ、舊笑原の庄と稱す、桑海の變沙漸く隆く地漸く拓け生駒氏の時市區初めて開け、源英公の封を受るに及んで街衢完成す、太平の餘澤海隅に被及し、人戸益々密に、生齒亦た滋し、東今橋を以て松島に接し、西鯀川橋を以て西濱村に連る、南は龜命、紫雲の山系連綿境をなし、北の方内海に枕み王屋山屏風狀をなして東に聳ゑ雌雄島諸島は翠光滴らんとし一帶水淡煙天を抹するものは三備の山影なり、山紫に水明に風光絶佳眞個に天府の地たり、市區井然人家櫛比、一渠あり市の北方を遶る、常盤橋を以て境となす、渠内を總稱して内坊と云ふ、蓋し舊藩時代の外郭内なり、常盤橋南の本道を丸龜坊、南新坊、田町と稱し高松繁昌の中心地なり、寺町及佛生山町の通路

に當る涼渠に沿ふ東西の一街を片原坊橋東兵庫坊橋西と云ふ、片原坊盡る所南北の一街を通坊、鹽屋坊と云ひ阿波街道兵庫坊盡る所東西の一街を西新通坊、西通坊と云ふ丸亀街道其他支坊を算し來れは鶴屋坊、本坊、魚屋坊、新材木町、東濱坊、築地坊、古新坊外磨屋坊、大工坊、紺屋坊、今新坊、古馬場坊、曰何坊曰何町繁を厭ふて悉くは云はず、是高松市の概略耳

常盤橋通附り片原坊夜景

高松新繁昌の中心地にして銀座通とも云ふ可きは、常盤橋通なり片原坊なり、想起す三十年前迄は古松老杉鬱蒼として尚猶ほ凄然たるの一寰區、今や幾十燭の電燈は街衢を照して夜晝に似たり、桑滄の變今昔の感に堪へざるものあり、高松の繁昌を呼號

せんとせは、勢此地の光景を描寫せざる可からず、讃岐に遊ふ者此坊を一觀せずんば、未た其に高松の繁昌を語る可からざるなり

大小の商廛軒を駢べ飲食店、小間物商其間に點綴す、香川縣廳は鐵門巍々として北角に殿たり、警察署あり郵便電信局あり旅館あり藝妓芳番所あり、劇場あり寄席あり、高松の粹は殆んと此兩坊に網羅して餘すところなし、四時の盛況全讃第一に居る時正に炎雲六月の候、金烏西に春き、紫雲山頭殘照將に光を收めんとす、讃岐有名の夕凪は籠紋を動かすを許さず、一柄の團扇を倩ふ苦熱の客、三々五々隊をなして集り來る、是に於て乎熱鬧の境漸くにして現出せんとす、二八に足らぬ乙女子母親に伴なはれ、小間物店に入て櫛花簪を强請あれば、一反五六十

錢の保多織（讃岐名産織物）の浴衣襷、黒地染出の兵子帶端長に結目を左に見せ、氷店をひやかす書生連あり、頭に擬パナマの帽子を載さ「ピンヘット」の煙を環に吹て過ぐる紳士あり、鳥打帽子の新形さも輕るさふに載せ「ステッキ」振り回しつゝ歩を運ぶ人犬殺と間違られぬが仕合と云ふ風体なり、文金高髷の蓮葉娘近隣のに轉婆娘と又しても夜行三味、未來の夫の品さだめ、餘り讖た談でもなし、一厨眼立つて見ゆるは根上り勝山（丸髷の別名にては勝山と云ふ、勝山とは或る嫩斜の巷勝山と云へる遊君初めて結びしに初まると或書に之を見たることあり）の妻君姿、髷の両側にちらほら見ゆる緋鹿子の掛物、三々九度の儀式を擧げてから未だ間もない樣子、新婚散歩の裏耻かしさ、二三間後れて尾行する風勢、右往左來に人織が如く肩摩轂擊涌に似たり何處の田紳ぞ鼻下疎髯を蓄ふ、五所紋の絽羽織襟筋を乱し右手

に蝙蝠傘と折詰を携ふ、酔歩跚珊二三の同行者と東劵（高松に二個の藤坂劵番所あり片原坊に在るを東劵と いひ内町に在るを西劵さいふ）の門前を過ぐ、輕裝涼を納るゝの妓之を認めて「アラ れ揃で淀川（有名の割烹店）のれ歸り……御宴會ですか」「いゝじやありませんか」の相返答は如何なる言語の反響なるか、……端なく彼の一行は鳥岩樓上に伴ひ去らる

毎月廿五日を華下天滿宮の御命日となす、詣人織るが如く頗る雑閙を極む、廟畔空地若干を餘す、當に見世物或は眼鏡の興行あり、見物人群集せり、「是が評版の水族館、大人が三錢で小供が二錢、立ちながら海底が分る、餌あさる有樣より眼に入る摸樣、能くれ眼を留めて御覽なさい、魚の種類が百と三十、播州沖で生取た大龜、胴の圍が六尺八寸サアー評判〳〵

「僅か五厘のれ愛嬌、繪の數が十と三枚八百屋れ七の一代記が

殘らず分る、サアーコリヤ〳〵お寺さんは駒込の吉祥寺……

祠畔寄席あり、規摸劇場に似て小なるもの飛梅閣と云ふ、蓋し寺廟に因みてなり、落語軍談浮れ節、女義太夫、說教源氏節等交々來て招牌を掲ぐ、太夫は多くは大阪下りにして、偶東京より來るあるも人氣澤山ならず、事些なると雖も人情の如何を知るに足る、境内せんざい屋(什粉屋の云)あり、以て下戸者流の口を充すに足る、土地の名代にて頗る繁昌せり、甘口のもの常に人の嗜好に適す、苦言獨世に容れられず、呵々

當公の廟俗に呼びなして小天神と云ふ、蓋し大天神に對しての稱なり、社内の掛況頗る兵庫の港川神社に似たり、數十武の間商座軒を駢べ、玩弄店やら飲食店、吹矢玉投繪草紙屋、盆栽、砂書讀賣の類破んばかりの賑ひなり

門前僅かに出る玉垣の畔、人山を築く一團は人造擊剣水の製造屋、にて、中瓶小瓶、狹處迄駢べ立て手前味噌の長口條口泡を飛す小瓶が五錢で中瓶が十錢、大瓶が十五錢、大瓶に求めのに方には製造法を書た秘傳が景物、姉さん嬢さんに買なさい、奥樣のに土產は如何で御座る、効能がなければ明晩に出で、に錢は其儘に返し申す定店でゴザイ、行人先づ其聲を聞て足を留めざるもの稀なり、何物の痴漢ぞ精神を拔かし、咄腰間の蝦蟇口掏奴の爲めに奪ひ去らる要心々々

菱形の制帽○字を印す、袖腕に至り褶膝に在り、意氣揚々大道狹しと歩を運ぶ、足尖向ふ所は片原坊の極東北位一曲、(甲)「今日は土曜日なり」(乙)「まさか入院はせまじ」知らず那邊に行かんとするか、苦々敗こと共なり

演劇の競爭一場開演すれば他場必ず蓋を開く

演劇場

高松に演劇場の存するもの二個所、蓋し近來の新築に係る、曰玉藻座曰歌舞伎座是なり、高松劇場の光景を叙せんとせば須らく先其沿革を述べざる可からず、

高松の人演劇を好むの性に於て冷熱の度如何、好劇の冷熱は以て劇場の盛衰に關す自然の勢なり、演劇の盛明治七八年の交を以て極まれりとなす、當時劇場の市内に存するもの曰、東濱町曰、出晴曰、馬場御旅所、而して俳優の來る者亦た上方の千両役者と唱ふるものにして尾上多見藏、市川鰹太郎、尾上菊三郎市川右團次の如き相踵で乘込來る、而して一場開演する時は他場亦た必ず蓋を開く彼是相競爭木戸賃に棧敷代に將た技藝に所謂反對と稱して靡を競ひ精を爭ひ互に觀客の多きを自負す、甚

だしきに致ては無代入場を許すに至る、觀客も自ら負嵎の偏するあり、甲譽乙毀一派をなす、人氣既に斯の如し、車夫の輩に至ても曰、た旅派、曰出晴派各々所屬あり、巧みに乘客を拘引し來る、

旅客の一連あり劇を見んとす、旅亭は所謂た旅派なり即ち相伴ふて到る、一客の少しく後るゝあり、車を驅て追行す梶棒は高松の東南に向ふ、既にして劇場に達す、謂ふ是れ旅所の演劇なりと、旅客焉ぞ知らん其出晴たるを、一連終に其處を異にす車夫の行爲惡む可しと雖も競爭の如何知る可きのみ、

演劇の當時人の嗜好に適する概ね前述の如し、而して其出物は如何、時代物隨一に居る、忠臣藏、仙臺萩、鏡山の如き最も好に投ず、其他金比羅御利生記、天下茶屋敵討、羽床騷動の類

高松市人の遊藝志想は女子教育の一専門科となる

高松の娘芝居起源

亦た主なるもの、轉じて世話物の屬に入らんかた染久松の如き小三金五郎の如き爲永一派の戯作が婦女子間に歡迎せられ、風教の上に一種の餘弊を傳へぬ、演劇の隆盛は市人の遊藝志想を涵養し、父母の心をして三味、舞踊を以て女子教育の一專門科に置き滔々たる天下亦た之を怪しゃず、是に於て乎高松に娘芝居の一派起る、而して其俳優たるもの多くは良家の子女、計以て生活の資に窮するにあらず、心梨園の戯を慕ひ自ら好んで其群に入る、一片の好事家を以て目せしもの、遂に沈んで業となすに至る、父兄見て以て奇とせず、却て之を奬勵するの風あり曰濱路、曰龜治、曰阿袖、曰鶴松（假りに俳名の一字を取り明々地に之を記さず）曰何曰何、遂に藝を賣て諸國を遊歷す、技藝上達見る可きものあり、濱路青菜頗る姿色あり、到處名優の譽を博す、勉勵怠らずんば

民間政治熱の興盤は人心を殺伐ならしめ觀劇の嗜好に一頓挫を來す

川上音次郎の改良二〇加演劇の中止解散

高松市人觀劇心の一變

他日一聲旗を揚ぐ可きもの惜哉往年病を以て近く芳紀三十八

明治十三四年の頃に至り、民間政治熱の勃興は當時の人心を殺伐ならしめ、觀劇の嗜好に一頓挫を來し是より梨園亦た振はず是より先き常盤橋内に一劇場起る名けて旭座と云ふ、名優の來て藝を演ずるを聞ず、偶々招牌を掲ぐれば「改良二〇加」の屬のみ、今の新俳優川上音次郎の如き仲て此場に來り「加波山事件」を演ず警官の臨檢あり、演ずの中止解散此時に創る、這般の演舞が如何に同情を牽きしか、官人行き商人行き士人行き書生行く、老に幼に男に女に、妙案聲譽遠近に喧傳す、田舍の人早く炊きて來る者、必ずしも良席を貪るにあらず、東洋民權家佐倉宗五郎の活劇を見んが爲めなり、町家の兒女曉に粧ふて集る者、必らずしも世話物の粹を見んとにはあらず、東北事件の

大立物花香恭次郎河野廣中等の一味連の愛妾が如何に節操を苦守するかを
撿せんが爲めなり
今日の壯士芝居なるものは、實に當時の改良二〇加なり、而し
て今の壯士芝居は其脚本に於て所作に於て寧ろ退歩せしなり、
川上一派の先輩が少なくも其演劇に於て取る所の針路未だ吾人
の胃腑に落ちざる所あり、濃脂粉態探偵小説を演ずるもの豈に
彼が能事ならんや
明治二十年以後に於ける高松の演劇社會亦た論ずるに足らざる
なり、人心の嗜好に一蹉跌を來せしか、斷て名優の來演するな
し、多くは是京坂落城の田舍廻運、僅かに脚本の筋を働作に上
すに過ぎず、況や壯士俳優の徒に至ては眞面目に演技するもの
幾人か有る、舞臺の高座に立て喃々耳語し、切殺されたる屍體

手動き足搖ぎ咳嗽するものさへあり藝道に不親切にして眞情を
寫すに足らず近頃演劇學校の設立を唱道するものある故なきに
あらざるなり
今を去ること數年前藝妓芝居なるものあり、高松の校書間に成
る素人演藝のみ、然れども其熱誠なる所作、優に本釜を壓する
ものあり、名聲噴々四方に噴傳たる由緒なきにあらず、妓流に
して藝道研究の目的を以て這般の擧ある寧ろ賞す可きなり
玉藻座は片原坊に在り明治三十二年の創立に係る、此地素と劇
場あり延壽閣と云ふ、大敗荒蕪用をなさず、四五の有志合資を
以て之を改築す、是今の玉藻座の前身なり、場の規模宏大なら
ずと雖も溜觀愛す可し三千の觀客を容るに足る、强て之を難ず
れば土地狹隘にして運動處の設なきなり、北面運梁に臨み汚水

歌舞伎座

歌舞伎座の名は東京に奪ひまらるゝの憂あり

潴溜空氣の清新ならざるなり、然れども高松の劇場として遜色なし

歌舞伎座は鹽屋坊に在り明治三十四年の新築に係る、高松演劇株式會社の設計に成る、歌舞伎座の名、何に因て起るか思ふに東京歌舞伎座の顰に倣ふものにあらざるか、名稱の如きは敢て齒牙にかくるに足らずとするも、讖岐或は高松を代表する名目を附することよからめ、既に歌舞伎座と云ふ、其名東京に奪ひ去らるゝの實あり、事些なるが如きも高松を天下に紹介するに於て關係なしとせんや、此場規摸の大建築の壯玉藻座に比し一頭地を拔くの觀あり、開場第一初舞臺を蹈みしものは中村雁次郎一座なりき、好優に渴する高松市人の希望を充たせしは永く紀念せずんばあらず、會社たるもの知らず吾人の希望を一時的

官衙の光景

に止まらしむるや如何、高松演劇の盛衰は繫ひで其責任に歸せすんばあらず

近頃西通町王子神社の構内、一大劇場を新築中なり、土木既に半を過ぐ落成の期近きにあらん、東西相應じて高松の劇連を興起せば、梨園の繁昌括目して待つ可きなり

官衙の光景

高松の官衙は數年前迄は悉く寺院の假寓に過ぎざりしなり、縣廳も市役所も郡役所も收稅署も皆寺院の建物を利用したりぬ、蓋し置縣後日猶淺く新築の歲月なきの致す所、然るに近頃着々其歩武を進め縣廳に警察署に稅務署に巍然一門をなす、高松の光彩を陸離たらしむるもの、此等の官衙建築物關りて力なしと

香川縣廳

椅子の逃懷

せんや、管に田舍漢をして鐵門々前唖然たらしむるのみならん

香川縣廳

香川縣廳は內町に在り、常盤橋の北詰鐵門巍々圍らすに木柵を以てす、正面を本廳となす、階子一段是を上局と云ふ、知事官房の在る處なり、修飾最も壯麗を極む、獨逸形の椅子一脚是ぞ知事公の踞する處、一縣の利福安寧は托して此椅子の主人公に在り、借問す汝の主人公、當縣以來屢々其主を異にす、疎髮長顏愛嬌滴れんとす濯服の經綸敢くに處なく縣民愛惜の間に別を告げし人あらん、銀將輕く顯邀を拂ひ長髮毛々時に詩を賦し書を弄す一年の星霜何の成す所ぞ非字の厄に罹り蹴立て行き人あらん、剛毅頑直已を信ずる石の如く推せども動かずつ

けども搖がず、機を見て逃げ出せし人あらん、席未だ暖まらず名殘を惜んで立ちし人あらん、全智全能殖產に工業に衞生に警察に何に御存知なきと云ふことなき御方もありつらん、政黨風の吹き回はしに飛で來りし落葉もあらん、赤門產の御歷々壯年敏腕の人もあり、尤大厚唇星社の流を汲む風流公子もありつらめ、(讀者曰、モー善加減にし賜へ椅子の逃懷が本書の賣口に關係しますよ)

階下一帶の處は勸業、會計、受附等にして、北方の一棟階上は警察部にして階下は巡査教習所と質業會の事務所なり、南北の二棟を一貫する室內には應接所あり、新聞記者扣所あり、時辰儀既に八時に近ふして縣廳の刻迫らんとす、鐵門々外人織るが如し、羽織袴に手辨當の人あり、想ふに近來臨時雇を拜命

出勤時間上に阿諛追従の得意な寒官の前に地方官吏の豈に算に遺れ左程の有るやせん

能く其情を知る者のみ知る

したる月七の官員様ならん、背廣の洋服ステッキ姿當年の意氣斗牛を呑むの風勢あり、是ぞ一課の課長殿にてもあらんか、時間に遅るゝを恐れ足早に歩む人、日曜の宿酔に眼を摩る人、悠有るの人定めて屬官以上ならん、悠なきの人必ずしも屬官以下にはあらず

登廳第一番各自認印を持ち上局に參じ出勤簿の一欄に印し來る是高等官以外に於て然るなり、上官既に登廳する時は体裁頗る悪し、丁寧に一禮し去る、此際に於ける上官の一瞥は、慥かに生命の短縮を覺ふらめ、拔からず寒暖に事よせ慰懃の禮を述ぶるものは阿諛者流なり、上官は唯だ頤を微動するか、或は見て知らぬ振をなす、下僚の輩に至ては、一上一下頭部の運動鞠躬をして三舍を避けしむ、既にして各自各課に着席して分業の事

好運滋潤穿ち得て妙

務を取扱ふ、勵精黽勉殆んど煙草一吹飲む暇だになしと云ふ、斯くして縣治上らずとせば、其罪決して夫子等に非らず

嗚呼午后四時の點鐘と上官退廳の聲音は如何に卿等の歡聲を以て迎へらるゝよ！給仕の馳せ來りて木札を裏にする瞬間は卿等が心中眼上の瘤を拂ひし心地やすらん

各課に木札を掛け上長官以下の姓名を記す、登廳すれば表示し退廳すれば裏返しとなす

廳内に於ける高等官の威嚴は侵す可からざるなり、仮令肩で風を切らざる迄でも、切るかの如く感ぜらるゝなり、食堂にまれ便所にまれ、自ら別區域をなす、人あり來て高等官便所に入る小使是を誰可して曰く、「此處へ這入てはならん」相顧みて其顏を見れば近來撰出の某縣會議員なり、小使唖然として去る、議員の勢力も亦た大なるかな、

高松地方裁判所附辯護士詰所

高松地方裁判所は區裁判所と共に内町にあり、規模宏大高松官衙の隨一に居る、鐵門一たび入れば石經一帶正面を本玄關となし右側は内玄關にして官人の昇降口なり、左側は受付にして廷丁及び書記二名出張す、受附前面新築の一棟之を登記所となす、登記所の雜閙名狀す可からず、所内常に市をなす、然ども吏務井然、秩序ありて乱れず、登記件數の多き一日數十を下らず、吏員の繁忙想像するに餘あり、夫れかあらぬか待合人中時に欠伸を漏らすものあり

偶一法廷の公開するあり、聞く放火犯の審問をなすと、傍聽人山の如し看守一囚人を監して入り來る、囚人顔貌猛獰一癖有りそうな面付なり、惡人ながらも今や甕底の窮鼠なり、其歩を

運ぶ屠所の羊も啻ならず、之に尼して來る者は辨護士某なり、烏帽子細衣人をして五圓紙幣の描畫を見るの想あらしむ、既にして掛官亦た着席、場内森々として水を撒きしが如し、裁判長徐に被告の姓名年齢を訊問し、且つ曰放火被告事件に付き公廷を開くと、檢察官の意見を叩く、檢事咳一咳して刑の適用を論す辨護士之に對して反駁を試む、端なく仙臺萩の對決場を見るの感あり、辨論漸く盡き裁判長は追て宣告する旨を通告し、一同退席す、休廷三十分時、再び開廷爰に宣告文の言渡あり、被告は有期徒刑十三年に處せらる、蓋し情狀を酌減してなり、被告悵然として首を垂る、辨護士曰く、本件宣告に不服ありと、被告と耳語し爰に上告の手續に及ぶ、宣告し終て判官一同戸障を排して内に入る是を刑事の公廷とす、其他民事に豫審に日々斷

訟する所十數件、爰に特筆す可きは條約改正後の裁判所の狀況なり豫審室に檢事局に一般人民に對する待遇大に優なるを見るべし證人參考人は勿論、被告人と雖も未だ有罪の決定を受ざるの間は、同じく是れ良民なり、政府の人權を重んずる一茲に至る眞に明治聖世の賜なり

法門北に入て左側人民扣所となし、登記所に來る者を過半數以上となす、其他傍聽に來る野次馬連、眞實召喚狀を受けて來るもの、扣所の中混雜云はん方なく、群衆の蚊聲人をして聾せんとす

人民扣所に對する東側の一棟、是を辨護士詰所となす、一度び其扣所内に入るか、辨士論客の星羅する所、卓子二臺椅子數脚處々に亂置せられ、二三枚の新聞紙は食餘の辨當箱と隣し、依

賴者の一件書類は絹裏海氣の風呂敷に密包せられ、法帽法衣と同居す、

一堂の内、容貌魁偉鬚髯粲然秀眉美將のものあり、軀體稜々瘦せて鶴の如きものあり、聲音呶嘶して難聲なる者、近視眼鏡を穿て妙に睨視する人、法廷に入らんとする人、出來る人、依賴者と耳語するあれば書類に註するあり、出入織が如く、順番を待合すの辨護士談笑の聲涌くが如し、其間詼諧百出、滑稽千吐、下手の落語家をして三舍を避けしむ、入ては正論卓議堂々の陣を張るの人、出ては和氣洋々の間に世態人情を善罵し去る何等の快事、其境遇轉た羨むに堪へたり

人あり樓内老生の上に佇立し、一辨護士と喃語す、中心憂を含むもの、如し、辨護士先生眉間に川字の皺襞を寄せ、考一考、

辨「サアー其處です夫が當方の弱點ですがドーカ成ましよふ」

と盡力一番するが如き語氣と態度を示せり　客曰、何分宜敷……

知らず如何なる事件なるやを、先生の一言無限の意味と伏線を

有す、辨護士も亦た如才なきかな、呵々

夫れ辨護士とは公けに立つ法名なり、平たく言へは代言人なり

原被の間に立て委任を受け黑白を法廷に爭ふ介者に外ならず、

而ふして其任や重し、生命に次ぐ財産、生命より尊き人權は或

る場合に於て慥かに卿等に擔保されつゝあるなり、敢に卿等が

心性の廉潔と胸臆の公平は、國家問題の繫る所、苟くも尋常職

業者を以て見る可からざるなり、高松の辨護士濟々多士、青年

敏腕の人に富む、幸に健在なれ

高松警察署

高松警察署は內町に在り、明治三十二年の新築に係る、舊堀傍

に在り滯政の頃某連枝の邸を以て之に充つ、門屏既に傾き破壁

時に殘月を漏らし、古瓦又た將に大雨を瀉せんとするの狀あり

市內の有志深く之を慨し義捐金を募集し、地方費其幾分を補助

し今の地に新築す、

常盤橋畔北へ入る數十武、規摸小なりと雖も石門鉄柵補ふに白

壁を以てす、簡潔佳麗の建築物問はでも知るき高松警察署たる

を正面を受附口となし、一査公常に監す、右側は應接所にして

左側は署長殿の面會口となす、硝子障を隔て、風丰の瞥見し得

可し、威儀端然優に一市の治安を司るに足る、試みに署內に入

らんか主計部あり刑事部あり、各所管の事務を分掌す、署員は

署長警視其任に當り、警部二名有て之を補佐す、一人は刑事を督し、一人は外勤を監す、部下五名の巡査部長と若干の巡査より成る、

人海人山警察門前市をなす、云ふ是れ「喧譁じや喧譁なり」と是賭博の結果にあらずんば、酒間の口論なり、門前群集の人多くは是本件「アツカリ」の爲め追願し來る者、同町内の顔きゝ若くは消防組の統領連

四十前後の拗婦風の者、十六七の少女を伴ふて入り來る、受付口に立つこと多時、身元職業の細より家計の狀況に至る迄備さに物語る、査公淳々懇諭するもゝ如し、是新に娼妓營業を願出づる者

一査公外套を卷て襷となし、制帽傾むかんす、脚半甲掛草鞋

願下預り人の出願

娼妓の新規營業願

傳遞護送

を穿ち、一罪囚を伴ひ來る、是れ所謂傳遞護送と稱するもの、既にして留置檻に幽閉す、檻は小使室の南に在り、禁錮頗る嚴なり一房一人制を取る

更に見る風通御召縮緬の三枚重、帽は新蝶々の結び立、襟雲時に二三の乱れを檢邊に齎らす、蓮歩珊々受付口に至て停る 査公曰、「旅行ですか、」是弦妓の他行屆に來る者、旅行々々室内旅行ならずんば幸なり

芸妓取締規則、妓の外泊を許さず又た旅行をなすもの必ず所轄警察署の認可を受くるを要す、而して其屆出自身出頭に限れると聞く

芸妓の旅行屆出室内旅行ならずんば幸なり

高松市役所

高松市役所は天神前に在り、淨願寺の一隅に割據す、蓋し新築の議決既に成り、設計豫算等も略ぼ終了せり、敷地は五番丁を

高松市役所

市役所執務の狀況

トし買取も完を告ぐ、而して市費の都合上未だ新築の運に至らざるは、市の光彩上聊か遺憾なき能はず、

市制實施以來既に十四星霜、市長の更迭するもの二回、自治の制度漸く緒に就き、治績見る可きもの少からず、築港落成の如き其主なんものか、市民たるもの深く謝する所なり、

卓子數十脚両側に駢列し、一個の椅子是に伴ふ、中央の上段別製の卓子を備ふ、森嚴塗の光澤燦然たり之を市長席となす、其傍に助役席あり、其他収入役に課長に各部署あり、筆を執て議案に註するもの、手を叉き考案を凝すもの、死亡診斷書を監査し書式に違ふとて却下するあれば、火葬認可證の調製を遲々し人民の催促を受くるもあり、轉居屆をひねくり戸籍簿を取擴ぐるあり、出産屆や婚姻屆、豫備兵の召集に後れて小言食ふもあり、種痘の期日を問に來るあれば、傳染病の屆書到着して消毒に出掛あり、納稅期日に後れて科金を徵集せられ滋々財布の紐解く人、我こそは多額の家屋稅を拂ふとて威張て金を出す人、一堂の内千態萬狀、千人千種の態をなし、萬容萬樣の狀をなす、掛員は殆ど忙殺せられんとす、此多忙紛乱の塲裏に立て事務非然敢て難澁の風を見ず、市吏員亦た人を得たりと云ふ可し

掃淨法の實施は市民の歡迎して措かざる所にして、市衛生の大本實に茲に起る、若干の掃淨掛員と掃除夫有て日々市街を巡羅し、清潔法を實施す、其勞大に多とする所、寧ろ御役目御苦勞に存じ侍るなり、卿等の熱心と勤勉は市人の夙に看取する所、青楷金徽の制嚴しく入り來る、語辭丁寧懇篤にして宛ながら

誰れか除き役人は幕府時代のものに目あかしよりも横柄なりと云ふ

高松市會議事堂

噛んで含めるが如く、人をして自治制下の役人は斯くもありたきものと想はしむ、誠に宜なりと云ふ可し。舊幕時代のたさへ目あかしよりも横柄なりとの評は畢竟卿等の本心を知らざる者の言のみ、泣兒が聲を留るとは兒守の毒言に外ならざるなり。

高松市會議事堂

高松市民の安危を雙肩に擔ふて立つ、市會議員を容るゝ議事堂は、市役所と同じく寺院の一隅に假居す、蓋し市人の本意にあらざる可し、市會議員は皆是當地有數の人種にして、市公民中鏘々の名ある人、實業家あれば銀行役員あり、醫者あれば辨護士あり、新聞記者に書籍商、あらゆる職業を有する人を網羅し、イザ鎌倉と云ふ日には、一方の將たる資格を有するに歴

高松の人物共進會場

市會議員の色分

々連の人物共進會場なり、市政多事の今日此等人材を有す、市民の幸福之に過ぎず、中には市會議員中に安座し奉るに、勿体なき器物に乏しからず、縣會議員は愚な事、國會議員として も恥しからざるもの、空しく市會議員中に老んとは、實に遺憾至極の次第にして、名馬未だ伯樂の撰に當らず、蛟龍未だ青雲の運に會せず、花嵐月雲の感なき能はず、然れども我市會の爲めには慶賀せずんばあらず、換言すれば市民の幸福なり、聞くが如くんば議員中種々なる黨派ありと、或は曰白派、或は曰赤派、或は曰青派、事情を知らざるの人、或は之を評して犬の啞譁視するも故なきにあらず、然れども是妄評の甚だしきものにして、無禮の言と云はまくのみ、要するに赤派と云ひ青派と云ふ、我市會の經となり緯となり、以て一段の錦繡を織出し市會

一市會議員曰、近來流行會はあり、ませんが、夫れは縣會の方へ一本鎖を上げて可しと

の光彩を添ふ、市政日を追て美なる亦た偶然にあらざるなり、多謝す名譽ある市會議員、怪む勿れ、流行の多きを、卿等は質に繁忙の職業を有しながら、枉げて此重任を負て議場に立つ、

抑流會の多きは寧ろ議案を鄭重に熟讀し、一件苟くもせざるの御趣意にもやあらんか、誰か云ふ流會は一種の議略なりと卿等の度量廣して大なり、一市會の上に於て何程の腦力をか勞せん、實に朝飯前の仕事なり、而して其心を用ゆる夫れ斯の如く厚し、卿等の撰擧區民に對する勉めたりと云ふ可し

香川縣會

新縣廳既に成り新警察署亦た成る、何ぞ新議事堂建築議決の遲き、燈臺元暗しも甚しと云ふ可し、滔々たる議員各位卿等が一

三十有餘の好閥閱定めて知る腦の豐富なるを

議員の議辭を容れざりし僥倖

議決の下、卿等を容るゝの議堂は直ちに建築せられ得るなり、廣々たる敷地は縣廳構内に在て議決を待つや久し、興正寺の別院、常盤園の廣間城内の共進會場等東漂西泊豈に卿等を容るゝ所ならんや

多謝す三十有餘の好閥閱、卿等の頭腦より湧出する新智識は、實に我一縣の智福安寧を立命の中に寄托し去て、猶ほ餘りある を覺ふ、如何なれば我香川縣民は斯る多智多能なる議員の下に生育せしか、實に冥加に餘ることにして嬉涙の溢るゝ想致すなり、想起す卿等の撰擧當時、卿等の固辭して肯せざるを強て擧げて今日あるを致せしなり、卿等の讓辭をして其志望に充たせしめなば今日の幸福は得られまじきものを僥倖なるかな香川縣民。

縣會に二種あり曰、通常縣會、曰臨時縣會、通常會は毎年十一月を以て廳下に開き、明年度の地方費豫算案を議す、臨時會は緊急事件の生ずる時、俄かに之を開く、別に縣參事會なるものあり、時々刻々之を開き、縣治上の要件にして臨時會開設に至らざるものを議了するの制なり

時維十一月中旬正に通常會の季節に至れば、多智多能なる議員諸君は、東より西より南より北より、綺羅星の如く集り來る、折柄は堅く議案書類を藏し、輕く腋窩に挾み、「フロックコート」に黑羽子織くあれば袴羽織に白足袋穿つもあり、議場狹しと乘込來る、縣理事者も亦た所管議案書類を携へ臨場す、堂內肅然たり、議長立て開會を宣言す、書記議案を朗讀す、質疑の幕は開かれぬ、既にして一議員立て某議案に對する意見を吐露す、

議員の雄辯

古人の先見、諺の至妙、

高松の新港灣附築港繁榮論

雄辯滔々デモステーヂス氏三舍を避け、ガンベッタ氏一歩を讓るの感あり、論理非然毫も乱れず、贊成者四方に起る、計論終結議長決を取る滿場總起立、議案出る毎に劈頭第一辨論するものは知名の四五君なりとす、聞く開會以來未だ一言の辨を費さゞるの議員ありと、能有る鷹は爪を隱すと、此諺は是等議員の爲めに豫め、古人の作り置かれしものと覺ゆ、香川縣會萬歲萬々歲

高松の新港灣附築港繁榮論

高松繁昌の一大革新を與へたるものは此港灣の落成に在り、高松市が三十萬圓の市債を起し、議論紛々たるの間に立ち幾多の苦境を侵し、開市以來の壯舉を企て、高松百年後の繁盛を購ひ

しは空前の事業たりし、築港設計の如何に付き云爲するものありと雖とも、當初創業の難を思へば恕するに足るの餘地を存す高松が四國の關門として商業の權を握るもの一に此港灣に待たざる可からず、吾人は近き將來に於て益其完全を希望するや切なり

石堤海中に突出する半哩許、遠く玉藻城廓を抱き、港内廣濶にして水鏡に似たり、屋山の翠影映寫する所、大船巨舶繫で棧橋の畔に在り、神戸以西先着の港にして瀬戸航海の氣船來て錨を投するもの晝夜煙を斷せず、

海岸一帶の新埋立地は廣袤數千坪を有す、新港町と云ふ、一丁目より四丁目に至る、家屋の新築せらるゝもの多し、泥砂猶ほ地盤を緻密ならしむるに足らずと雖も、星遷り物換り幾百年後

の高松は、此地土一升に金一升たらざるなきを知らんや

港の西方金比羅宮を祀る、堤坊一帶地平かにして草濃かなり、夏時海水浴の設あり、市人納涼の地となす、大小の飲食店軒を駢べ頗る繁盛を極む、既を敗き甌を呼ふ海風徐に來て醉顔を拂ふ、風景の美愛す可し

新港繁榮論

題して新港繁榮論と云ふも、寧ろ繁榮策に過ぎず、古今土地の盛衰を按ずるに自然の大勢關て力あり人力の得て左右す可からざるが如きも、時機作る可し手を空ふして待つべけんや、今の世に於て人智を利用し一定度迄は猶ほ天理を動かす難にあらず、況んや地の利をや、我新港の繁榮を希望するや

繁榮策の權道と正道

築港前の希望

切なり、而して其策二を得たり、一は正道にして一は權道なり、正は君子の道にして、權は小人の道のみ、世の士君子の間に如何の譏あらんも、余は寧ろ權道を取らんとす、幸に所論が世人の同情を引くに足らんか、以て其策を講ず可し、講じて而して實踐の途に就け

抑も高松築港の議あるや、市人は謂らく落成の曉には其繁榮期して待つ可し、數月ならずして移住者山の如くならん、土地狹して人多し遲れは噬臍の悔あるべし、貸與申込可し拂下願出べし、建築の棒標立てざる可からず、出入職工の豫約こそ必要なれと景氣頗る大にして氣焰當る可からざりき、然るにイザ落成の曉に至り豫望嵯峨市人が懷抱の半にだも充たざりき、蓋し港灣設計の豫測素志に乖りし點其一部原因をなし

港灣の繁榮は小舟の出入頻繁なるに在り

港灣繁榮要素の失却は堀川口の埋立に在り

八重垣遊廓の移轉論

たりと雖ども他に主因なくんばあらず吾人大に說あるも茲に要なければ省く

港灣の繁榮は小舟の出入頻繁なるに在り嘗に大船巨船のみに重を置く可けんや「堀川口の埋立は小舟停船の便を殺ぎしものにして端なく繁榮の要素を失却せしに外ならず、新港落成以來東濱港の賑を增多せしは事實上明白なる徵證なり、今の場合に於て新港の繁榮を期するは最大一の急務なり、幸ひなる哉二府十六縣の共進會は新港附近の玉藻城內於て開設せらる、此機逸す可からず高松市民たるもの全力を注で繁榮の中心を此地に東集せさる可からず、其策果して如何、曰く八重垣町遊廓の移轉是なり是れ吾人の權道策として唱道する所以なり、昔者庄司甚左衛門吉原町を創設し、當時戰國

餘弊の殺伐なる人心を融和し、幕府が施政上に貢獻する所あり、古今時代を異にすと雖も眞理の存する所豈二道あらんや娼妓存廢の議論は暫く措き、政府が是を公許する以上は一理の之に伴ふものあらん、然れども說者或は難ずらく、士君子の齒せざる遊廓を高松の門戸に置き、且つ交通至便の地に設く、寧ろ他國に對する羞耻にして淫風誘引の嫌なきにあらずと、難者の言一應尤もなるが如きも是れ皮想の見のみ、高松に遊廓なくんば止む、官既に公許し現存するのみならず、改造新築近來稍繁盛の狀あるは何ぞや、警世家の者曰す可き點にして一考を要する價値なしとせんや、敢て卑見を陳ずる者偶然にあらざるなり

高松竹枝　讃岐　宮武梅嶺

漁舟幾隊釣烟波。濺濺紅鱗魚似花。三月金山味堪賞。春風遍入滿城家。（赤山濱園云。流麗。久保羅谷云。紅魚上市滿城利春矣。好竹枝。）

高松八景　三節　讃岐　山田晋香

時値艷陽晴色新。郊村何心事嬉春。海汀潮退沙猶濕。幾隊筠籃撈蛤人。（高州撈蛤）

幾個高樓面々開。齊言楚語太喧豗。無端氣笛飛聲急。一艘追隨一艦來。（新港待舟）

斜陽逗影海雲邊。一帶微山紫翠鮮。波細於絲風不起。櫓聲伊軋晚漁船。（絲滘夕照）

盂蘭盆踊

「妹がり送る文月のさやけき月の影慕ひ若も老も打群て踊歩ぞ面白き」と源春野大人の長歌、能く盂蘭盆踊の狀況を描寫得たりと云ふ可し、燈節既に過ぎ十四五六の三日、一連三夜男女團繞舞蹈をなす、昔者諸州皆な之あり、而して畿最も盛なり維新以後官之を禁ず、蓋し風紀に關するの故を以てなり、後香川縣三豊の時、知事林薫之を許す、爾來或は禁じ或は許し、方針劃一に出ず、兩三年來官復た嚴禁今や踊影を見ず、茲に其狀況を寫す者せめてもの名殘とせんのみ

節中元に近ぎ盆踊の季將に迫らんとす、滿市の士女殆と狂せんとす、新衣を裁し粧束を美にし、紅聯紫翩隊を結て競ひ舞ふ、未だ以て滑稽の萬變態を盡すに如かずと雖も其手を揮ひ脚を扭り短を履み節を合す千も亦た一身萬も亦一態賞觀を取るに堪へたり、謳概ね一曲節に過ぎず、美音なる者一人引をなす、衆皆な從て和す、歌に數種あり、其一に曰く

一合蒔た籾種の其桝有高は一斗と一升、一合と一句サアーヨウイ〳〵ヨウイヤセ

聞くなれ聞くなれ聞くなれ、十五夜た月程聞くなれ

音吐優美にして節面白し、男にして女裝、女にして男裝、鳳舞ひ蝶飛ぶ、衣其色を同ゆしで以て競奢を鬪はす、土俗必すしも妙齡の士女のみならず、「隣りからこつそり出たる踊かな」夫婦行き老爺行き阿婆も亦た行く、俗にして袈裟を脊にする者、僧にして長袖を飄へす者、或は鎌籠を負ひ、或は蓑薦を被むり、

盆踊復活論

古人が制定せし年中行事の精神

奇狀怪態百鬼夜行の風あり、士君子見て以て眉を顰むるとするも、蓋し一場の觀となさん、彼處の一團踊罷で此處に謠起る、若し夫れ治遊子狎妓に伴ふて往き、良家の士女少年と手を携へて踊るの段に至ては風紀問題として救濟の法を講せずんはあらず、其法盆踊の禁止を以て足りとするか

盆踊復活論

盆踊禁ず可きか將た禁ず可からざるか、蓋し警世家の熟考を煩はす價値なしとせんや、余は寧ろ其復活を希圖して止まざるものなり、盆踊の禁止原因が單に風紀上の問題に止まるとせば吾人は容易に首肯する能はざるなり、抑も盆踊の起源沿革に就ては玆に努々するの要なきも古人が年中行事として制定せし五節句其他の舊制度の裏面には幾多の精神の伏在する

盆踊の禁止は下等社會の樂の惡見を奪ひ去るの實あり

を忘る可からず、盆踊の如き冷眼を以て看れば一の繚風たるに過ぎずと雖も是に因て以て人心を融和し引て施政上の或る手段に利用するが如きは頗る妙案ならん、又た人事上より云ふも中流以下勞働社會の娛樂の大部を奪ひ去るの實あり、勿論上流社會に在ては自ら平常の鬱を散し悶を排するの方法に乏しからずと雖も下流社會、殊に全國民の十分の七を占むる農民等に至ては一年三百六十餘日星を戴て門を出で月を倚て歸る、粒々たるの辛苦、得る所勞する所に當らず、彼等が娛樂とする所は、盆正月と五節句のみ、試みに其心事を穿たんに、盆前二三ヶ月間は如何なる希望を以て作業に從事するか、勤勉貯蓄盆着の新衣を裁し、同僚相集り相和し、共に伴ふて舞蹈に出掛る位が關の山にして、其間の愉快と娛樂は迚

も都人士の想像にだも及ばざる所なり、一連三夜踊草臥て猶ほ勞を覺へず、其心樂めばなり、盆踊の一段落濟めば其次はた祭禮、其又次はた正月と、輪環又た輪環、堪へす希望の馬に鞭ち、四六時中を夢裡に經過す、何ぞ夫れ生計の淡き、寧ろ欽羨に堪へさるなり、斯る無邪氣にして單鈍なる下等民族の排悶具たる盆踊を禁止するに至ては無情も亦た極れりと謂つ可し、物一利あれば一害あり何ぞ盆踊のみに限らんや、唯だ利害の輕重を比較し、因て以て採否を決す可し、盆踊禁止令が風紀一天張を以て行政警察の精神なりとせば、之を防遏するの法一にして足らず、調曲の改正、舞蹈の取締（仮令男女混踊を禁するの類）等當局者の意見に任して可なり、敢て盆踊復活論を作る

○中元竹枝　高松　片山沖堂

風塵歸來已欲昏。滿街涼月肉絲喧。城門放レ夜人如レ海。儘認二中元一作二上元一。

徑丈紅燈等三月光。登レ場幾個蹈踊娘。不言粉黛之三姿媚。粧點逼レ眞時樣粧。男裝巧學木蘭姿。寶劍橫レ腰映月輝。月鍵誰家遊冶子。衆中曾見縞袴レ衣。

神社の祭禮

何れの地か神社なからん、何れの處か祭禮あらざらん、然れども高松の地神社頗る多し、隨て祭禮亦た少しとせず、曰石清尾神社、曰大、小天滿宮曰蛭子神社曰、王子神社、曰愛宕神社、曰水天宮、曰藤森神社、曰門神社曰何宮、逐一枚擧に遑あらじ、今其著名なるもの二三を掲げて祭禮の一班を窺知するに便す、

石清尾八幡宮——市立ち祭典

石清尾八幡宮は高松の氏神なり、龜山の東麓に在り、社内廣濶祠宇宏壯、神柱表立し、砌堀砥布す、廟宇東に面し拜殿其下に在り、石階の左右銀杏樹あり雌雄相對し枝葉翳鬱天を磨す、景

趣鎌倉鶴が岡八幡宮に似たり、玉藻集に載る山上元塔あり之を丹す、靈驗と號す、俗に丹堂と稱す、卽ち[illegible]

家熊木居城の後猶之を俯瞰す、一說に細川幽齋[illegible]年細川頼之八幡宮に新願し神助により[illegible]より戰勝を得深く信仰する所なり[illegible]

跨る二日多く農道具を賣る、俗之を呼で右馬頭市と云ふ、山佐八幡亦此市あり、四月三日は細川頼之誕生の日なり、遠近の老幼、男女來り集ふ、近來植木類を商ふ者多し、蓋し國中隨一の大市なり

石清尾祭禮　每歲九月十五日、放生會あり、神輿行幸して行宮に至る　行宮通俗呼んで御旅所と云ふ　期に先ち里中六七歲の童子二人を卜し、齋戒沐浴以て尸聲となす、而して神輿に先て幸す、浴呼んで先靈と云ふ、是獨り此宮の舊例にして他邦になし、祭禮の儀式鹵簿の盛觀に至ては全國稀に見る所、蓋し高松藩祖源英公の代、

信仰淺からず堂宇壯麗を極め祭事大に備る、或は曰其制一に鶴ヶ岡八幡宮に擬すと、

祭典の餘興に至ては高松全市の賑を極め、各坊出物あり或は曰飾船、或は曰、囃子或は曰、踊屋臺或は曰、獅子互に美を競ひ精を爭ふ、童幼群集、士女逐跡熱鬧の狀筆して傳ふ可からず

●●飾舫は武裝軍艦の狀を摸するもの、中古戰鬪艦の俗と見て可なり、綾羅錦繡、金紋縫匠美を盡し善を極め如るに金釘銀鋲を以てす、旋旗風に飜り、船歌謠々鼓聲鏨々、調優にして節而白く功ましなんど云ふ計りなし

●●囃子は新作の歌曲を以て祭典を祝するもの、三味太鼓胡弓、琴笛の合奏にして各々趣向を爭そふ囃子臺上特意の出物を飾る、

鰹鉾に薙刀　有銀治町　能面と　狸々　西通町　竹に雀　松島　鎮西八郎に鬼　四濱町

海老町古新其他各坊意匠を異にす

●●●踊屋臺は二個の臺礎より成る、一は舞踊の用に供し一は地歌音曲の用に供す、維新以后故あり官之を禁ぜしもの近來に至り再興踊子なる者は十歳乃至十四五歳の少女にして、濃脂粉黛、衣帶盛粧美を闘はし麗を競ふ、千艶萬嬌、物云ふ伏見人形、五官有る嵐山の花、羅繖繻へる時蝴蝶舞ひ、長袖拂ふ處鴛鴦戯る、歩々香を生じ、隊々彩を吐く、舞曲多くは是れ三踊より成る、前、中時代物を演じ后段は手踊なり、艶婉阿嬌梅何ぞ麗なる、桃何ぞ妖なる、杏腮愛す可く柳腰寵す可し、而して舞蹈は可憐無心なる少女に依て技曲に上る、觀者蟻集目送忙しく評騭魂蕩するもの故なきにあらず、踊子なる者市内の師匠連の弟子に非らずんば狹斜の雛妓なり、衣裳に演舞に甲乙互ひに英を競ふ　例年踊屋臺を奉納するもの鹽屋坊、丸龜坊、田坊、南新坊、兵庫坊、

通坊、西新通坊となす

序に記す、祭禮の費用は實に巨大にして飾物一艘に五十金、囃子一臺五十金、踊屋臺に至ては百金以上を要するものあり、盛觀以て察するに足る

蛭子祭と愛宕祭――夏祭の盛觀

附り十日蛭子――福奪ひ

蛭子神社（附高松花柳盛衰論（八重垣遊廓））

蛭子神社は東濱に在るものと、北濱に在るものと二あり、例歳七月十日を以て祭典を擧行す、愛宕神社は西濱町に在り、八月廿四日を以て祭典となす、東西相對峙して高松夏祭の盛觀を添ふ、蛭子神社の東濱に在るもの、毎年陰歴一月十日を以て福奪を行ふ、俗に十日蛭子と謂ひ、詣人最も多し、福奪は近國に喧傳し、之を備前西大寺に比せば稍一籌を輸すと雖も亦た天下の

一奇觀なり、屈強の壯漢伍を組み隊を結び、神符を拾ふ、各々等差あり一より五に至る、既にして奪ひ得たるの福は豫定の家に搾込を例とす、福を搾込れたる家は無上の緣起となし、酒肴を經して之を犒ふ、

此日社務所に於て御籤を賣る、詣人必ず先づ之を購ひ、以て今年の吉凶を卜ふ、篠に吊したる小俵と小貝は蛭子宮下の紀念品として珍重せらる

一帶の假橋長虹に似たり、兩岸の凉燈群星を背く、海水深く澎入し自ら東濱と北濱の境をなす、楊柳輕く石磯を拂ふの處

籠を捲くの樓船金波を縫て往く、「吹けよ川風揚れよ青簾中の御客の顏見たさ」何處の風流才子ぞ二三の校書を携へ眞猫の興を買ふ、濕絃韵濁りて濤聲に和し、嬌歌一曲端なく風を倩ふて吹き來る、「歌に曰、

便なき身は浮舟の浪枕此處に結ぶの神ます濱の眞砂の數々よりも積る思を屋島山、待夜は啼ぬ杜鵑、玉藻の城の時つくる

二上り　鐘より細き絲よりも沖津浪間にあるまさへ、雄木と雌木との妹背中、あまと呼ばるゝいやしき身にも唯一筋に釣小舟

蛭子神社の北、白砂一帶の廣漠地は維新後の埋立にして俗に八重垣新地と云ふ、高松の遊廓此處に在り、「娼樓十數軒娼妓半百自ら別乾坤をなす、蓋し高松の銷金窩場たり、例年蛭子祭に

は煙火綱火の奉納あり土地大に賑ふ

八重垣遊廓の事著者故ありて是を詳説せず、聊か所思あればなり、然れども茲に高松花柳の盛衰を略叙し、好事家の一粲に博す題して高松花柳の盛衰論と云ふ

高松花柳の盛衰論

高松花柳の事我是を云ふに忍びざるなり、抑も花柳の事素と社會の隱事に屬す公然其盛を鳴らして世間に流布せんか、少年子弟をして淫に導き無限の間に害毒を流す鮮少にあらず、然ども官之を公許する所以のもの幾多の原因あればなり、要するに人情極秘の弱點を漏らし聊か以て獸慾を充たす一魔窟と見て可ふり魔窟の盛衰我に於て何かあらん、然るに天賦の人性は得て其間の消息を知らんと勉め、中流以上上流の人士にして猶ほ且つ之を喜ぶの風あり、試みに交際社會に於ける談柄の種類を吟味し見よ、必ずや虚半ばに過ぐるものあらん表面上苦々敗事共なりとして微笑するの人共心中却て燃るが如き情念を有するもの蓋し通情なり、唯だ是れ隱事を隱事として表はに現はさぬ間こそ却て實もあれ花もあれ、世に所謂新聞紙の三面記事なるものあり、藏する所の記事多くは是市井の巷談のみ、士君子の見て以て快とせざる所、然るに此記事の多少巧拙は以て新聞紙の寶高に關すと、童蒙婦女の多數同情を買ふ原因もあるべけれど、又た以て世俗の嗜好を見るに足らん、東京大阪の大新聞と稱するものさへ近來此種の

原稿を滿載するもの果して喜ぶ可きか如何、

吾人が故に高松花柳の盛衰を論ずるもの敢て新聞の三面記事の流亞に倣ふものにあらざるも聊か以て高松の人心を知るに於て要なしとせんや、

八重垣遊廓の新設は明治五六年の交と記憶す、當時に於ける花柳巷は實に全盛の極なりき、士人行き官人行き富豪行き豪農行く、而して時の社會は毫も怪まざりき、却て通人粋士なりとして暗に奬勵したり、夫子も亦た自ら紀文大盡を氣取り揚州の大守に擬し、爭て腰纏を擲つ、白日青天比魔郷を活歩して憚らず、人をして傍若無人の別乾坤たるの感を有せしめたり、社會上層の人斯の如し下層の屬知る可きのみ、

花柳社會の事を老ふるに淫風汚俗を以て滿天下に彌蔓せしめしもの其即社會上流人の責に歸せざるを得ず、昔者大名侯伯爭て狹斜の巷に遊び一代の豪となす抑も

何の故ぞ上の好む所下之に倣ふ滔々俗をなし千古の習を傳ふ高松の如き雄藩後年所の久しからざる途に如斯を致したるかい去るにても世の採風者流が名妓名娼傳杯を盛んに紹介し發興壯遊を以て天下の快と呼びなしたるが如きは、時勢の然らしむる所なりとはいへ、思はざるの甚しきものと云ふべし、

八重垣遊廓の全盛も寸善の夢なりき、さしも高大なりし樓閣も多くは荒墟に歸し、亦た上流士人の脚を緊ぐに足ず、僅かに船夫書生、破戒の俗僧、無頼の遊人等の蹂躪に任し樓數に於て妓數に於て亦た舊時の觀なし、是果して喜ぶ可き現象なりしか

吾人は此反動の或點に逸せしを嘆ぜずんばあらず

両三年來死灰再燃稍々色めく風ありしも、人權問題たる自由廢業は又もや一頓挫を來しぬ、

去今二十年前。余落魄寓レ于三東都。友人三木愛花。著二仙洞美人禪一。余題レ之有三詩節一。附記充二惋惜之資一。呵々。

花落柳殘恨更長。蹉跎好事付茫々。紅顏易改眼前雨。綠髮難

留老後紺。薄命枉傾虛腹意。無情强說假心腸。可憐遊冶輕浮甚。將此苦郷作樂郷。

看來寸善寸魔天。色則是空利了然。才子沈痾多後累。美人薄命或前緣。幻中豪興悟餘悔。夢裏狂遊覺後禪。狂想白櫻花外路。醉顏紅映夕陽船。

白衣輕裝錢囊の人多くは是海邊涼を納るの客、三々五々隊をなし海水浴に入る者、氷店に踞する者、蛭子祠畔人濤に似たり、北濱より來る者、東濱より行く者、假橋々上人危からんとす、二〇加狂言、素人芝居、娘義太夫等餘興の數々あり市内夏祭中の隨一に居る

愛宕神社附り由加祭の歸帆

蛭子祭に次ぎ夏祭の有名なるは愛宕祭なり、愛宕神社は綠撚濱に在り、境内廣からずと雖も風景明媚眺望最も佳なり、夏祭の狀況、蛭子神社と大同小異なればくだくしく云はず、唯だ備前由加祭の歸帆多くは錨を此處に投じ、幾百人の詩人船邊敲ひて謳ふさまいと面白し、

無數輕帆藻海天。晚風影鎖港門煙。謳歌一曲隨潮到。多是由加香客船。

（作者不知）

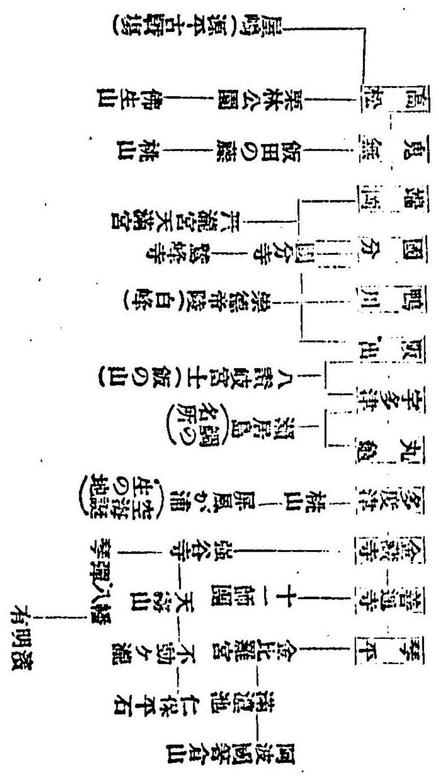
讃岐鐵道高松停車場

琴平宮大會に付き
全線各驛何處から何處へ行くも
拾錢以上の運賃なし

高松停車場は西濱町に在り讃岐鐵道の東部終

點なり、讃岐鐵道は多度津を起點とし琴平に至るものと、高松に至るものとあり、全線三十哩内外の短距離なりと雖も利益多き線路にして株券の時價遙かに券面以上に居る、聞く更に社債を起して丸亀善通寺間に枝線を布設すと、愈々落成の曉には一層の利便を得可し

此鉄道は多度津、琴平間を目的とし、琴平參詣の便を謀り創設せしものにして、純然たる遊覽鉄道なり、然るに布設後善通寺に第十一師團の新設あり、高松に新港灣の工事成り、彼是相關して大に必要の線路とをり、今や貨物に乘客に全國鐵道中出色の觀あり、市場に優勢なる價値を持つもの故なきにあらず、試みに此鐵道を利用して高松以西の名勝古跡を尋討せんか、旅客一日の遊覽、以て百日の憂を拂ふ可し



高松の地旅館の見るべきものなし、割烹店の顧るに足る可きなし、蓋し遠來の旅客を迎ふるに於て鎖國の迷夢未だ全く覺めず依然たる舊幕時代の郡宿の類のみ、旅人の不快を感ずるもの旅館の不備より甚しきはなし、高松の人あらゆる進歩に伴ふ設備に就て殆んど閑然す可きなきが如し、而して獨り旅館に於て呉下の阿蒙を學ぶもの遺憾に堪へざるなり、偶々二府十六縣共進會の開設に際し多少の準備をなすものあるも畢竟捕盜捉繩の譏を免れず、苟くも高松の繁榮を企圖せんとせば須らく先づ其膳

立を良好にするにあり、旅館改良の如き最も急務とする所なり、吾人が忌憚なく此言をなすもの高松を愛するの切なればなり、業を旅館に執る者余が卑見を容るゝや否や、

然れども高松の旅館が從來發達せざりしもの單に旅館の責に歸す可からず、他に講究す可き原因の有るあり、曰く、高松に集る旅人の品位の低き是なり、又た高松港が特別港の取扱を受くると云ふにあらず、隨て旅客の往來少く僅かに商船會社の小汽船が齎らす商賈、遊覽客の類に過ぎず、故に其必要を認めざるの感もありしならん、高松の旅客にして其素性を洗はんか大阪邊の商賈が取引上の爲め來る者にあらずんば、村落の旦那衆の訴訟事件を帶びて泊る者なり、其他行政官廳の所在地なるを以て郡村の小吏の滯在するあるも、切り詰めたる旅費日當

到底旅館のた爲筋にあらず、十錢の茶代に血の涙を流し、割烹の良否を品評するに至ては、引合た話にあらず、一年一度の縣會議員樣の御宿、脇目美々敷見ゆれど其實負の引き倒しにて錢便細かくして人使ひ荒く、仲居をして蔭口を放たしむるに至ては沙汰の限と申すべし、清水の舞臺を飛んだ心地して、偶々藝妓を呼ぶか多くは是十時過の送込を見透してなり、二割口錢も算盤に出會ず

中央政府の官人地方巡回に來る者、親任官は格別として高等五六等位にては訪問客の多き割合に身入少く茶代の呑み倒され損とは或る旅館の述懷談

近來世上の一問題たる茶代全廢論も強ち無理とは思はねど旅館の心情も聊か酌分ざる可からず、高松の如き圓助以上の茶代を

投ずるの客眞に雨夜の星なりとかや、茶代全廢の事都會に於てこそ實施の功果もあれ、田舍にては旅館の培養策として寧ろ存置の要を認む、唯た旅館の心地してほしきは茶代の厚薄により直ちに以て待遇の冷熱を來さゞる樣注意するに在り、こは人情に背く野暮者流の言に似たるも高松の旅館其人に富む是程の事何の難きかあらん

高松旅館案內（旅客の利便）

高松ホテル　內町に在り建築壯麗、玉藻城に面し新港を去る數丁、眺望絕佳なり

可祝樓　常盤橋畔に在り、新築の樓舍天を凌ぐ、客室を增築し待遇も良なり

東京館　高松の中央にして利便多し、割烹店を兼業し高松旅館の錦々たる者內町に在り、高松ホテルの別店なり

角田旅館　丸龜町に在り、高松繁昌の中心地にして從來名代の旅店なり

藤枝軒　西新通町に在り、建築古雅、器物什具の風雅なる此樓の右に出づるもの高松になし、知名の文人雅客常に來て杖を停むるもの必ず此亭

となす、通称藤屋常平と云ふ

玉藻楼 内町草頭に在り、流船問屋田中庄八の本店なり、建築壮麗、眺望絶佳、市井に遠きを以て閑静なり

川六旅館 片原町に在り、氣受よき旅店なり

井上旅館 兵庫町に在り、規模大ならざるも客を遇する極めて懇篤なりとの評高し

朝日楼 片原町に在り、二層の高楼天を凌ぐ、東西眺れに行くも至便の地なり

永島旅館 古新町に在り、今來の陽奚に伝るも設備完全評判よろし

岡本旅館 濱の丁に在り、流船問屋を兼ぬ、旅客の利便多し（尾崎流船會社高松代理店）

井戸屋館 四通町に在り、停車場に近し、名代の旅館なり

割烹店

割烹店 單に割烹を營なむものあり、旅店を兼るものあり、玆には其專業者に就て紹介す可し、高松の割烹店多し悉く之を擧れば數十を以て算す可し、然れども其翹楚なる者は四五の外に

高松竹枝
一醉忘他
萬鮮愁
滿風明月
淀川横笛散
鶴橋歌
何邊去
知是東濱
牡蠣舟

出ず、曰、淀川楼、曰、時和園、曰、可祝楼共に五六十名内外を容る可し、（高松に公會堂を建つるの議已に成り、東宮殿下御慶事の紀念とせんとす、縣費を以て之に充つる事となり、工事猶ほ未だ其落成なる者は玉藻城西の一隅にあり）

淀川楼 在内町

両街橋北に渡る處、衡門西に向ふ左曲十數武是を淀川楼の本玄關となす、大花瓶に時花を挿み、二三の紅裙跪座團欒、歇々低語す、一客あり、泥醉繃の如し、足元定めぬ千鳥足、曼跚として入り來る、知是某楼の送別會の餘派、所謂二次會を張らんとするに在り、楼婢に扶けられて一室に入る、室は楼上の三號なり、客帽を捨て仰臥水を呼ぶ、婢聲に應じて立て行く、既にして抔盤來る客曰く「酒なくて何の已が櫻かな」杯を受けて一啜す、ダミ聲を揚て歌ふ「山で赤ひのーが躑躅に椿……」所謂磯

節とやら　婢曰　明書　藝妓の姓名を記し其を取りに遣ましよふか、東で
すか西ですか　客曰　西は此樓へ這入樣に成たかね　婢曰　アラ能く御
承知……チョイト　明紙　高松に二個の藝妓勞番所あり互に相結抗す割烹店亦
た自ら派あり淀川樓は所謂東派にして四派の藝人ら
す、「婢の言柱げて客を「から　時既に十時に近し、知名の妓多くは是
かわん」が爲めに欺ちしと知れ
箱切、餘す所僅に近來賣出の某々のみ、客曰　しかたがない○○
に○○に○○にしよふ、婢曰　其儘で早く（其儘とは妓の盛裝せ
ずして來るを意味す）
隣房客あり聘するに妓子二枚を以てす、鳳絃暫らく沈んで時に
笑聲を漏らす、三號室の客妓聲を聞て立ち障を排して欄に倚る
蓋し隙見せんが爲めなり、想ふに熟知の妓ならん　樓婢尾し來て
曰、たヨシナサイ、イケマセンヨ！客首を抱へて去る
更に見る樓下の一室、二三の紳士來て長夜の飲を買ふ、臺下短

からざるの所、却て待遇の優なるを喜ぶ、數多の酌婦共に取捲
かれ、人三化七の甜言をまに受け若干の纏頭を擲つ、纏頭を得
たる酌婦連入らざる風をなして一揖し、窺かに之を帶の間に狹
む、知らず指頭を以て多寡を卜ふや否、宜なるかな樓婢多くは
給料を取らず、所謂祝儀取と稱ふるものにして衣服の資より脂
粉の料に至る迄皆纏頭を以て之に充つ、其之を貪る故なきにあ
らず、然れども今時の客種は狡猾なり、纏頭を投ずるの客幾人
か有る、是に於てか幾十の酌婦何に由てか衣せん？彼の身邊相
等の衣帶を纏ふ……泰着の三枚重　注　目せよ其紋所に
纏頭の分配法、樓に由て各制を異にす、姉さん株以下按分比
例を以てするあり、或は平等にするあり、各人の所得に任すあ
り、高松割烹店の惡風とも云ふ可きは一人の客に數多の酌婦の

取捲是なり、樓の繁閑に應じて別あるも、甲去り乙來り孰か是れ主任なるや判別に苦む、客にして綱頭を投ずるの意あるも頭數の多きは躊躇し遂に不問に附するものあり、土地の事情に通せざる人、當に此嘆を發ず、割烹店たるもの改良して可なり

時和園　在當盤橋内

淀川樓に比して一籌を輸するも、高松割烹店の鏘々たるもの、此樓近頃西洋料理を兼ぬ、且つ京洛移裁の花を養ひ杯盤の間に侍べらしむ、年少の弟子來て興を買ふ者多し庭園數寄を凝らし花木を點綴し、春の朝の富貴草、秋の夕の月見草、四季折々の眺を畜ふ、蓋し此園を措て他に類を見ず淀川樓の庭園一顧の價なきにあらざるも而も古色に乏し、若し夫れ春雨蕭々の晨、神樂堂上湘簾深く鎖し二三瓶の菊正宗湯豆腐を下物となし、相

知の名妓と對酌す、時に低絃爪彈の快を取る、風流の眞味誰か有てか解せん、當代の謝安知る何者ぞ、黄鳥の來て階下に初音を弄するもの、多少の妬心なからんや

此樓東西両劵番の妓を入れ、客の命ずる所に從ふ、然れども稍々西派に偏するの風ありと果して然るや否や、記して以て解遊者に質す

割烹店の狀況暫らく茲に筆を擱す、爾他の各樓大概大同小異のみ左に四五の名稱を擧げてせめてもの名殘となさん、我敢て遊治を誘ふ者にあらざるも聊か以て參老に資す

松の家　百間町東ノ丁に在り鰻飯を以て名あり、四五年前迄は微々たる一小飲食店に過ぎざりき近來今の地に移り樓閣を新築し繁榮を極む客種も亦た中流以上に多く割烹の妙優に高松市中の魁に居る

可祝樓　割烹樓としての可祝樓より寧ろ旅館として高松一二等を下らず是れ前項に於て記述せり、此樓の女將中々の才物今日の隆盛内助の功多きに居る、客種は上流社會に多く評判よろし

梅月亭　今新町左折する處に在り小なりと雖も清新雅潔愛す可し、女將は曾て是れ藝苑覇を爭ふ者頗る姿色あり當年教坊の間に噴々たる者

浪華亭　今新町四ノ丁に在り、親子飯を以て名あり此亭待遇優にして遊費亦た廉なりと云ふ割烹清新賞す可し

兒玉家　百間町に在り女將は素さられ者の果、料理潔酒愛す可し、紳士紳商の潜伏する處、清風明月の夜簾を捲て淺酌微吟の興を買ふ最も妙

鳥岩樓　片原町に在り三層の高樓天を凌ぐ近頃西洋料理店を兼ね、高松繁華の中心点に位置を占む、價廉にして遊客多し

いろは　丸亀町に在り最近の開業に係る、最廉、簡個を以て鳴る、客種中流以下なるも後來望あり、散策の歸途輕酌を呼ぶに宜し

田村肉店　高松の割烹店大概遊費廉ならず、就中小樓に於て然り、獨り田村に於て其群に闕らず、茲を以て日々繁榮を極め今日新築の運に逢ふ故なきにあらず

高松藝妓劣番所

高松藝妓劣番所

東劣と西劣

高松の妓流今を去ること十數年前迄は茜裙娘子の屬のみ、所謂町藝子と稱し杯盤の間に幹施し傍ら絃技を賣る、未だ劣番の制あらざるなり、明治廿一二年の交、招縣と相前後して劣番所の設あり爾來盛衰常なく數年前東、西劣番の別起る、蓋し感情の障突然らしむると云ふ、是より相反目するの狀あり、旅亭も亦た自ら派をなし桔抗して今日に至る、其間和睦聯合の議なきにあらざるも事多くは破れ両陣相對峙せり

東劣番は片原町に在り妓數時有て增減あるも雛妓と合せて四十珠内外、西劣番は常盤橋内に在り妓數三十珠に充たず、逐一其月旦を下すは余等凡人の企て及ぶ所にあらず、況や風敎の上に益なきをや、左に概括して總評す可し

町藝子時代

東西両劣番

高松妓流の特色

高松妓流の特色

天下廣し敎斜の巷多し、未だ曾て高松の如き自前藝妓の多き地

高松の藝妓は生産的思想に富む

高松藝妓は任侠立引の念慮なし

高松の藝妓は著音器仕掛の生人形の如し

あらざるなり、故に主人持にあらずして世渡持なり、藝妓として眞に藝を賣る者なり、二三の取除なきにあらざるも要するに風儀の善良なる個人的制裁の隙密の間に行はるゝ點に就ては優に他邦に誇るに足る、偶々旅人の此地に來る者世の所謂藝妓觀をなして一驚を喫するもの故なきにあらず。高松の藝妓は生産的思想に富む、是と同時に氣慨力に乏し故に任侠立引抔の念慮は更になし、偶々談ずるに足る者あるも曉天の殘星のみ一般の妓風島人的根性を有し因循姑息而も活氣なし、彼か宴席の間に侍べるや蓄音機仕掛の生人形の如し器械の龜の子唯だ手足の蠢動するのみ一座春風の感を惹起せしむるに足らず、其手腕の點に於て遺憾なき能はず、怪しむ勿れ近來妓氣の振はざる要するに教育の如何大に關て力あり、今日教坊に籍を掲ぐるの聲多

現今藝妓思想の墜落原因

往昔藝妓思想の優美なる原因

くは是れ天下靜謐の世に生れ、時勢の變動に遭遇せず、藝妓たらしめんが爲め教育せし貧家の養女のみ、烏鴉漸く成て舞技二三を暗ずれば直ちに來て餞に代ゆ、多少の姿色有るもの必ずしも藝の功拙を問はず、而して江湖の冶遊滔々之を奇とせず慨嘆に堪ゆ可けんや

想起す維新前後天下紛乱麻の如き時、良家の士女産を失ふて誤つて教坊に落つ、武士的教育の根底は深く其腦裏に印し義氣任侠男子を凌ぐものあり以て世態人情を語る可し、今の世に於て這種の名妓を望む可からずとするも少くも其品流を高尚にならしむるは藝苑の活氣を添ゆるに於て稗益なしとせんや

愛妓論

愛琴樓主人

愛の定義

男女相愛は猶ほ電氣作用の如し

婦人の勢力男子殺伐の風を調和す

妓を愛す可し親む可らず、親む可し淫す可らず、是れ余が妓を愛する定義となす、抑も聲色なる者は宴席の花なり、男子殺伐の氣風を融和調定して春風の感あらしむるもの妓を措て他にあるなし、男女両姓の間に於る猶ほ電氣作用の如し同姓相排して異性相合す、蓋し天地の通理なり、原知の自然なり、苟しくも此性情を缺如するこせば知覺精神の異常を疑はずんばあらず、於是乎愛妓は人の通有性たるを知らん

太古時代に於ける野蠻曚昧の民が、殺戮殘忍到らざるなき行爲も婦女の一言は猶ほ其氣風の一端を減殺し、戰國時代に於る騎馬武者が鬼氣鬱勃たる情念も半卷の笑詩に聊か餘情を漏らす、一方より觀察すれば「婦女子の言」「風教問題」抔八釜

敷議論もあるべけれど、此は是れ玄關口の立論にして宇宙の實際は必ずしも行儀正しきものにあらず、深く警世に心あるもの須らく眼孔を大にす可し

余性酷だ妓を愛す花晨月夕必ず相伴ふて遊ぶ、而して酒を貪るにあらず、音曲を弄するにあらず、興を買ふなり、情を買ふなり、色の如きは形而下の問題として齒するを許さず、河畔樹下風を追ひ花を求めて漫歩逍遙す、能く親しんで惑も亂れず、能く和して決して淫せず、却て花鳥風月を品題す、歌を作て彼に附與し時に嬌喉に上せしめ、詩を吟じて彼に和せしめ共に合唱す、此間の趣味言ふ可からざるものあり、要するに余は妓を以て天性を利用して排悶の具に供し、彼を以て一種の美術觀となす故に其盛裝粉態の狀を愛せずんば、淡粧

輕衣の風を好む、余曾て詩あり「澹月疎籠對酌峙。三杯美酒醉回遲。紅裙狂作青衫態。富商楓橋夜泊詩」（愛花情濃嗚呼、所レ批鶴作）

夫れ愛妓此意味に於てせんか産を破り家を傾くるの憂なからん、世の青年子弟妓を愛するは可なり、唯だ其定義を誤らずんば幸なり、然るに這般の哲理を解するの人幾干かある、穴賢

（完）

嘆む可き生産的思想

「愛妓論」の論旨にして果して緊肯を得たるものとせは高松の藝妓は其生産的思想を有する點に於ては慥かに合格する資格を具備せり、然るに不幸にも其生産的志想が最とも賤む可き性質を懐抱するを弔せずんばあらず、高松の藝妓が外見上私窩子的の行動を露さざるは暫らく社會の隱微に被膜するものにして喜ぶ可き無あるも、部内に蟠屈する情弊に至ては壺毒を流す決して

高松妓流の不人情

古來高松妓流に情死なし

尠少にあらず、吾人は明々地に之を說かずと雖ども、富豪の年少年々歳々身を誤り家を破る者、續々踵を接し、剩へ其結果を見て恬として顧みず、窃かに以て冷評するものありと云ふ、抑々異性相愛の弱點に乘し意趣深く蛇蝎の毒を逞し營養補血の材料を吸收し去て高見の見物をきめ込むに至つては、第二者の至愚無智素より憐む可しと雖も抑も妓流に節操なく信義なく俠氣なく輕佻浮薄實に惡む可きものあり、若し夫れ斯る風儀を以て當世なりと言はゞ余亦た何をか評せん、世に殉死、情死なるものあり、殉死は今や其制なしと雖も情死に至ては古今猶ほ其跡を斷す、情死者の心中素より無智の年少、痴情の迷誤より來る厭世旨義に外ならず、或る場合に於ては必ずしも情の爲めにせざるものあるも、苟くも共に俱に手を携へ（能ふ可くんば）

情死者の行爲笑ふ可し、濃厚情惱む可し

妓風改良論

妓風の復古

白柏子の品性

死出三途の行旅を企つ、彼是の心中大に決する所なくんばあらず、其行爲笑ふ可しと雖も濃思厚情惱む可きなり、吾人は高松妓流に情死の勸誘をなすものにあらざるも、少なくも道義の念慮を加味せよと云ふに在り

妓風改良論　（線香代の直上）

妓風の改良す可き點一にして足らず、然れども吾人は寧ろ其復古を希望する者にして鎌倉幕府時代に於る白柏子風に改ためんこと余が持論なり、當時の白柏子なるものが如何に高尚にして優美なりしか、歌舞の技能は暫らく措き生花、茶道、行儀の禮より詩歌琴碁の嗜淺からず、文學の思想に富み、

源義經と靜御前

妓風改良は藝苑百年の事業なり

妓風敗頽の原因

優に英雄の志氣を皷舞するに足る、「吉野山峰の白雪踏み分けて入りにし人の跡ぞ戀しき」靜御前の義經に於ける此情歌が果して靜の自製に出づるか後世稗官の史筆になりしやは別問題として當年の白柏子が氣品の一般を窺ひ得るに餘あり、吾人が古風にも本論を草するもの深意の在て存するなり

今日の妓流に向て這般の事を望む頗る難問たるが如きも、藝苑百年の事業として後世其實施の績を見んか吾人は死後知己を得たるを喜ばん、然れども刻下の急務として實行す可きは多少の改良を加へ妓風の敗頽を防遏するに在り

妓風敗頽の一大原因は職として教育の不完に歸するも一は以て其收入の少きに在り是を歐州の妓に比するも實に百分の一だよ價せず、殊に高松の聲妓の如き姿色技藝両絶の者にし

藝妓一ケ月の收入額

藝妓の受込料略

て百金一ケ月を得るもの絶てあるなし、聞が如くはんば一ケ月六拾金内外を以て上乗とし（痴漢の費線香代等二重費をなすものは論外あり）一割の労番費用と、二割の割烹店口銭を減し更に税金を引き去れば殘る所僅かに參拾金餘に過ぎず、是を以て生計、交際の費に充て剩へ脂粉の料は勿論、彼の生命より貴重する衣服の資に供せんとす、到底支へ得べきにあらず、於是乎忍んで不品行の所業を營む素より數の免れざるる所なり、偶々紅顔有富未だ世情に通ぜざる良家の子弟を擒にせんか、虎呑狼食の鞏を學ぶ實に悲絶悽絶鬼人の觀あり、端なく奴恐る可し、近く可からざるの感あらしむる偶然にあらず、

世に聲妓を入れて妻となす者。人之を賤む以て家計を托するに足らずとなす妓自らも亦た卑下して之を甘受するの風あり

藝妓の品流

妓風改良の一眼目

藝妓學校の設立

自然的制裁の涵養

妓風改良の姑息策

抑妓流の品位低きの致す所にして妓夫れ自ら死地に陷るなり、此社會的制裁を排除して妓にして良家の妻となる、備さに世態人情を知る者、寧ろ良人の名譽なりとの聲價を博するは妓風改良の一大眼目にして其彼岸は敢て遠きにあらず、妓風改良の策如何

藝妓學校の設立是なり、妙齡篤志の婦女にして志願の者は是に入學せしめ、諸般の學術技藝を演習し、卒業の上は免狀を附與し初て藝を賣らしむの制とす可し、而して不品行の所爲あらんか藝妓交互間の自然的制裁を嚴にし是を取締る時は、「不義はお家の御はつと」たる念慮を助長し益々優美の風を作る難事にあらず

現今の處にては差向藝妓家政の興富策とし線香代の直上をな

線香代の擬上げ、祝儀の習慣を作るべし

客數を減するは一時の影響のみ

し、線香代の外遊廓に祝儀を仕拂はすべし、其額の如きは敢て云爲せざるも卑見によれば一時間壹圓位となし、祝儀は其半額にて足らん、斯くして彼の生計を豊ならしむるは聊か以て品位改良の階梯たらざるなきを知らんや

客數を減ずるならんかとの懸念は然ることながら要するに一時の影響のみ毫も憂るに足らざるなり、宴席に藝妓を要するは異性相愛、陰陽調和の原理に適するものなればなり

高松の實業界

高松商人の石橋金鞋主義

高松の實業界

高松の實業界が二三年以來出色の觀あり斬然一頭角を四國の地に拔くに至りしは實に喜ばしき事にして、現に高松の地に生息する者に在ては其感覺鈍きが如きも試みに數年他縣に移住し近來歸高せし人に質し見よ、猶ほ旅行して歸來乳兒の發育に驚くと同一の感あらん、然れども高松商人の進取力に乏く常に石橋金鞋主義を取り合資投産の大義を知らず、金を撒じて金を取るの術に於て缺る所あり、猶ほ鎖國の殘夢に彷徨するは大に改善を要する點ならん、此篇に於て實業上の統計的觀察を下すは本旨にあらざるを以て茲には文明的商人の事業と人名を列記し後進の龜鑑とす可し

下津製燈所　高松の士族にして夙に日新文明の大氣を呼吸し卒先して製造業に着手し其目的を達し一方に於ては幾多の貧民に授産の業を與へ益

々盛大の域に達せしものは高松の製麻事業なり所長を誰とかなす下津永行是なり、氏が設計制策一として文明的ならざるはなし其今日あるを致せしものは實に千辛萬苦の好果なり

新居活版所　高松活版所の鼻祖にして明治四年廢藩置縣の際木字活版を興し同八年鉛版器械を以て斯業を創む爾來三十年一日の如く印刷業に從事するもの唯だ新居活版所あるのみ所長を誰とかなす新居政七其人なり、舊高松藩士なり

中川改良肥料商　讃岐農作物改良を以て畢生の目的となし卒先して改良肥料の販賣に從事し技師に就き學理を研究し試作園を設ろて實地試驗をなし・著書を發行して農作改良の説を吐く、一言一行文明的ならざるはなし、是を誰とかなす中川市太郎其人なり、吾人は讃岐農産物の漸次に改善すると同時に氏の力を多とせざるを得ず

松岡千壽堂　讃岐名産魚鳥鑑諧を以て其名を天下に博せし魚落雁、鳴大和煎の製造本舗なり、八景砂糖に梅砂糖に國産の整揃を以て己の任とし高松菓子商の牛耳を執り、半開の時代に於て盛んに廣告器關を利用し文明流の商業に從事せしもの獨り松岡千壽堂のみ堂主を松岡庫太郎となす、高松の風月堂なりとの評あり

小野龜玉堂　千壽堂と相對峙して菓子商中偉名を有するもの龜玉堂となす、茶用菓子製造を以て名あり、風味古雅愛す可し

鈴木蓬萊堂　高松に「食パン」製造業のなきを慨し卒先して其業を創意し盛んに製造販賣に從事し大に世評を博せしもの鈴木蓬萊堂なり、本店を四新通町に置き製造所を設け、支店を片原町に置き販賣の業に從ふ、高松商人中出色の觀あり、堂主を鈴木金次郎と云ふ、開業以來日猶ほ淺ふして聲價已に馳す今より勉精怠らずんば他日頭角を大に現はすに至らん

高松織物會社　紺保多織の製造を以て名あり、讃岐保多織の聲價を博するも高松織物會社の蓋し同社の力多きに居る、保多織の沿革其他に就てば盛んに紹介するの機あらん

高松製紙會社　製紙一年壹万函關西有數の製紙會社たり

高松電燈會社　牛窪求馬、北村荷吉、等諸同志の間に成る、高松の天地をして不夜城の觀あらしめたるもの一に氏等の賜なり、近來業務擴張、株券の時價遙に券面以上に居る

高松の賣藥行商（高松の生産力）

賣藥を以て天下に名あるもの啻に越中富山のみならざるなり、讃岐高松の名が千金丹に出て如何に紹介せられしか吾人は特に多説せざるを得ず春末夏初の交數千人の行商が日本全國に派出する光景は一場の壯觀なり

抑も賣藥なるものが天下多數の生靈を應急救治し得て山間僻地の醫家未だ全たからざる片隅の民をして安心立命する者、少なくも今の世に於て其功多大なりとせざるを得ず、果して然らんには苟くも藥を賣藥商に執るもの國家に對する義務として製劑に用量に注意周到を要す可きは論なきなり、世間往々聲を大にして其實之に伴はざるもの比々然らざるはなし

獨り高松の千金丹が日新學理を應用して着々改良賣藥の實踐を試みるは萬綠叢中の一點紅たる感あり、大津繪一首梅園子の作に係る、附記して睡魔を拂ふの資に供す

丸に定紋思ひ〳〵の印を入れて肩に蝙蝠傘、手に鞄、本家は讃州高松市〇〇家傳の千金丹其又藥の効能はたんせき溜飲食中り、頭痛と目廻に立暈み、にがり腹にはしぶり腹、小人方には五肝驚風の虫腹いたみチンチンチン今日やむ暮ふむ天氣御氣嫌宜しく毎度大氣に雖有さ賣捌く

高松の賣藥商中製造所舗を設き盛に行商に從事するもの四五にして足らず、曰岡内、曰樫村、曰森、曰岡、曰石濱曰何曰何、而して實に岡内勸弘堂其鼻祖たり

岡内勸弘堂　明治二十年賣藥行商の事業を企て僅々五十名の行商人を四國三備地方に派し千金丹の名を以て盛んに行商をなさしむ、實に讃岐賣藥行商の嚆矢なり、同年六月京都村雲日榮殿下の御用藥となり、益々聲價を博し爾來日本全國に派及し、現今千百餘名の行商を有し一年十五萬圓餘の賣揚高に上る盛なりといふ可し

樫村讃盛堂　岡内觀弘堂に次で賣藥行商に名あるもの

森岡生堂、岡天賞堂、石濱蘇生堂の如き　皆是れ相當の販路を有し一年の賣揚高數十萬に上る豈に驚く可き巨額ならずや

賣藥業者の消息如に於て何かあらん、然れども高松の生産力將た讃岐の富源力が斯業者の手に由て培養されつゝありとすれば、縣當局者たるもの深く鑑みざる可からず、仮令保護せざるも其發達を阻隔するが如き行動は勉めて之を避けさる可からず

行商に出掛る數千人の壯丁が産業を得て一年の生計を安穩に送るもの主として此事業の庇蔭に因る賣藥の盛衰が其國人文の度合に關する云々の議論は暫らく別問題として讃岐國土以外の金錢を吸收し高松を富有ならしむる點に於ては實に愛鄉的の精神に基くものにして高松市民の歡迎して措かざる所なり、吾人は雙手を上て這般の事業を奬勵するものなり、高松の賣藥業者其製造に注意し親切懇篤に斯業に從ひ滿天下の信用を博するに於ては小は以て高松の繁昌を助け大は以て讃岐國富の原因たらざるなきを知らんや、警むる處は高松商人の通弊たる眼前の小利に迷ひ商界百年の大計を忘却するの一事なり、當業者以て如何となす

病院と醫師（高松の衛生機關）

高松の醫事衛生機關設備の如何に就ては吾人大に說ありと雖も茲に要なければ云はず、唯だ其沿革の概略と現今の狀況を記述するに留めん

高松市公立病院

今の高松市公立病院は香川縣立病院の後身なり或事情により縣病院の廢絕後、高松市の繼續事業として異名同實を以て生る、此病院の創設を尋ぬるに其由來甚だ遠し、明治五年の頃時の有志者、富山甚三郎、鈴木傳五郎等の富豪と柏原益、長尼益吉、高坂柳軒、齋藤柳泉等の醫師と其他地方官の盡力により共立の名を以て起る、當時の人心猶ほ漢醫を尊び洋醫を畏る一日の患者二三人を出でず、甚だしきに至ては新平民を誘導して無料の下に手術を受けしめ以て洋法醫術の技倆を示し一般人心を勸誘したりき、創立時の困難想ふ可し、當時の院長は內田抱一なり次て今井春平、瀧澤清顯、山根文策等歷任山根の後を享くる者を長町耕平、柴田長道、神村兼亮となす即ち現在の院長なり、此院眼科部を別置し黑田計吉部長たり

柏原病院

外磨屋町に在り、院長醫學士柏原長英其主宰たり副院長尾崎卯一醫務を幫助す、高松市內私立病院の魁一に居る、內科及小兒科を以て名あり副院長は外科に長す、篤學の人なり、其他四五の醫員

あり頗る盛大を極む

前田胃腸病院 今新町に在り院長前田道弘、副院長前田米太郎、高松専門病院の鼻祖にして藥を請ふ者屋々門に滿つ

拙誠堂診察所 西新通町に在り醫學士長町耕平主司たり、外科を以て名あり

十全堂高阪醫院 野方町に在り院長醫學得業士高坂駒三郎、小兒科を專門となし諸種外科的疾患の無血性治療に名あり、患者門前市をなす故なきにあらず

長尾三橋堂醫院 西新通町に在り、耳鼻咽喉科を專門となす醫學得業士長尾折三是が主任たり、此家累代○を業とす、高松醫流の舊家なり

宮武内科醫院 田町に在り院主は醫學得業る宮武秀夫なり、内科を以て其名遠近に聞ゆ、爰さに高松市公立病院の内科部長たりし人なり

柏原産科婦人科醫院 新井戸に在り婦産科を專門とし院主柏原義雄之を監す高松唯一の婦産科專門醫院なり

太田醫院 中新町に在り婦産科及内科を以て鳴る醫院太田辰三是が主任たり

武下外科醫院 福田町に在り院主醫學得業士武下吉次之を監す、日新學理を應用し洋式外科從事する者此院を措て他にあるなし

赤松醫院 南鍛冶屋町に在り院主赤松齡三老練の人なり

青木病院 西瓦町に在り院主青木素一、慈善家の名高し

山田眼療院 今新町に在り院長山田仲三郎、民望殊に篤し、高松眼科醫の牛耳を執る

梅谷眼科醫院 塩屋町に在り、醫學得業士梅谷幹人の監する處、若手賣出にして評判よろし、聞く日新學理に照して業務に熱成する此院の右に出づるなしと

湖崎眼科院 塩屋町に在り、湖崎武吉院主たり高松眼科醫中錚々たるもの、老錬の士なり

宮本眼療所 馬場町に在り院主は宮本義夫慈さに市立病院の眼科部長たり實地熟達を以て名あり

築地醫院 新通町に在り院主築地新次

明石醫院 外磨屋町に在り院主明石種次郎、壯年妙腕の國手たり

醫家案内中或は擇に漏れたるあらんも茲には有名のものを紹介せしのみ、人の病を療する擇醫の必要なる論なし、聊か以て案となす、況んや旅人の偶々來て當地に滞在するもの土地の事情を知らざるに於てをや、病に應じて醫を尋ぬるの便たるを得ば幸甚なり

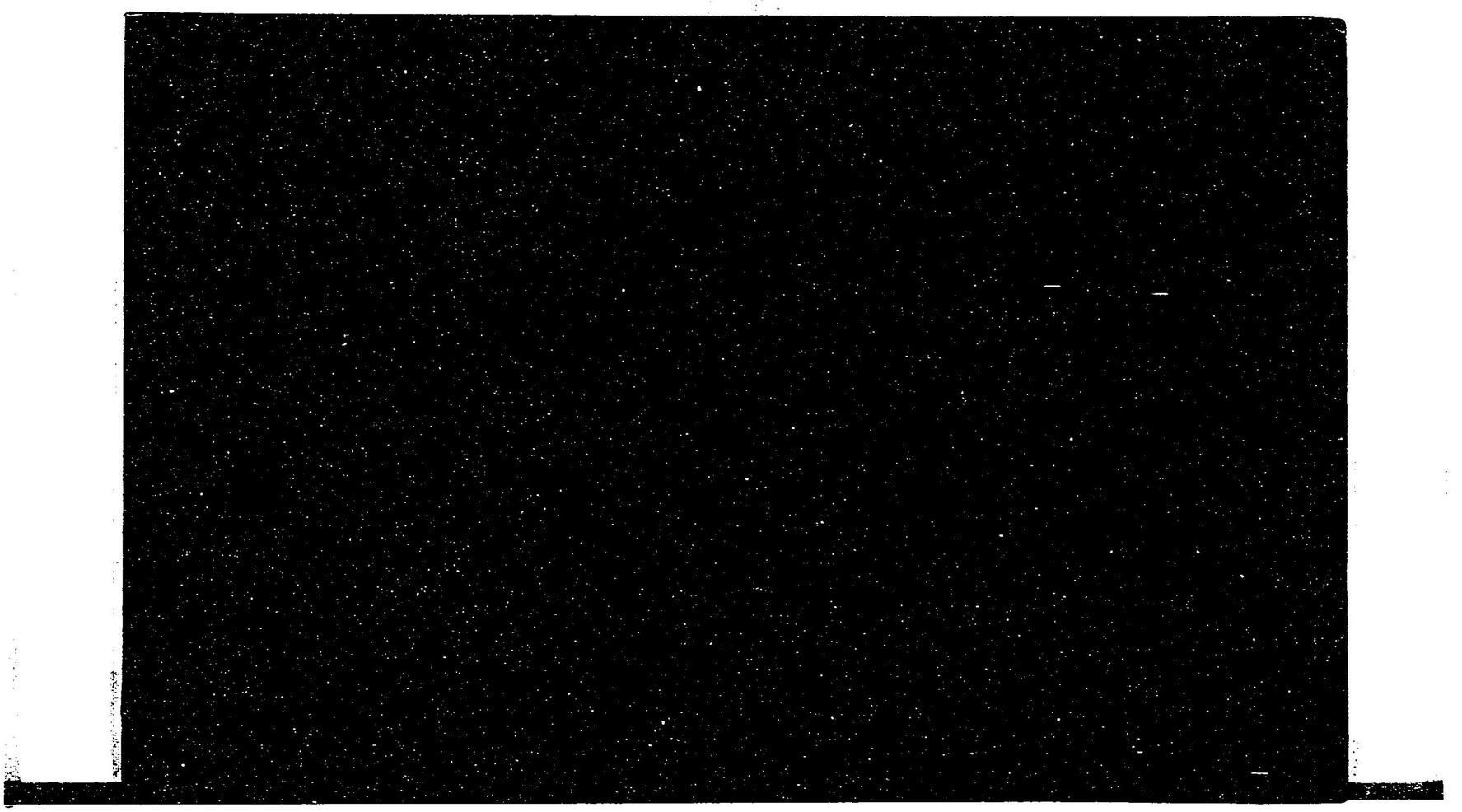
* * * * * *

豫告

本編中猶漏れたるもの多し、學校、銀行、商店、公園等枚擧に遑あらず、然れども此稿豫じめ紙數に制限を置き且つ出版期日の迫れるに過ふ故に不本意にも茲に筆を擱す、他日增補改訂の期あらん而して其期の遲速は讀者愛顧の如何に關す、唯だ是れ一場の戲墨たるに過ぎざるも著者の用心文字外に取て可なり敢て記す

長尾藻城著
讃岐風景論 附讃岐人性論
發行處 高松市丸亀町 宮脇開益堂

82
407



82
407

026094−000−2

82−407

高松新繁昌史

春琴樓主人／著

M35
ADC−3751

36.4.24